宗教
III
132

内務省
14.6.18
正本

霊界物語

霊主体従

酉之巻

出口瑞月口述

始

函 宗數
Ⅲ
號 宗數 132
永久保存

牧5이
248

出口瑞月口述

眞善美愛

天聲社發行

〔靈界物語五十八巻〕

51.12.16
國立國會圖書館藏書
1094686

瑞月先生近影

序文

本卷も又例の如く三日の間に口述編纂を終りました。着手（三月廿八日）以來天候險惡にして、夜見の濱に打寄する激浪怒濤の響きや、硝子戸を暴風の搖る音、春雨の聲、並に東北隣の旅亭に聞こゆる三味線、安來節の聲等に合せ口述の拍子を採りながら諄々として進み行く。

出雲富士ほど苦勞はしても
末を松江で氣は安來。

この歌の文句を栞となし乍ら、末の代のため松の神、五六七の神代の教草の一端にもと、油の渴きし口車、湯茶をガブ〳〵呑みながら、口述臺に安臥して神の儘に〳〵

述べ終る。筆者は加藤、北村兩氏にして前卷も同樣なり。ア、惟神御靈の恩頼を謹み感謝し奉る。

大正十二年二月三十日午后三時　口述者　瑞月識

瑞月

自然愛虚僞の社會に飽き果て、
元津御國の慕はしくなりぬ
形ある寶は失せむさりながら
愛と眞との寶永久

眞善美愛（酉の卷）目次

序文……頁
總說……一

第一篇　玉石混淆

第一章　神風……三
第二章　多數尻……一七
第三章　怪散……三三
第四章　鹽銅……五一
第五章　潔別……六九

第二篇　湖上神通

第六章　茶袋……八五
第七章　神船……一〇〇
第八章　孤島……一一八
第九章　湖月……一三四

第三篇　千波萬波

第一〇章　報恩……一五一
第一一章　欺乃……一六二
第一二章　素破抜……一七八
第一三章　兎耳……一八八
第一四章　猩々島……二〇一
第一五章　哀別……二一六
第一六章　聖歌……二三五
第一七章　怪物……二五〇
第一八章　船待……二六七

第四篇　猩々潔白

第一九章　舞踏……二八七
第二〇章　酒談……三〇七
第二一章　舘歸……三一八
第二二章　獸婚……三二九
第二三章　晝餐……三四五

目次

第二四章　禮　祭……三五七
第二五章　萬　歳　樂……三七〇

眞善美愛（酉の巻）目次終

眞善美愛 【酉の卷】〔58〕

口述者　出口瑞月
筆錄者　北村隆光
加藤明子

總說

聖言に曰ふ『神は最弱き者、小さき者、及び愚なるものに眞理を覺し玉ふ』とあり。大本神諭に曰く『生れ赤兒の混りの無い心にならねば神の誠の大精神は判らぬぞよ』と示されあり、佛敎には『難問する所あれば小乘の法を以て答にざれ、但大乘を以て爲に解脫して一切種智を得せしめよ、云々』『菩薩は常に安穩ならしめんことを樂ひて法を

說け、云々』とあり。大乘に非らざれば覺り得ざる如き學盲者は只その種智を得るに過ぎない。決して天國の愛と善、信と眞との光明靈德に浴する事は出來ないものである安穩にして法を說けとは老幼婦女子にも解し易きやう極めて卑近の例を引き、平易簡單にして直ちにその精神を諒解し得らるゝやうに說けとの意である。この物語も亦神示に從ひ可成的平易なる文句にて說き、卑近なる言語を使用して神明の深き大御心を悟らしめんと努めたるを以て、學者紳士の讀物としては適當しないものたるは素より覺悟の前である。一人なり共多數の人々に解し易く徹底し易からしめんと欲する至情より口述せしものであります。又本物語は讀者を決して今日の所謂知識階級に求めやうとするのでは有りません。愚者無學者弱者のため編著したものであります。

大正十二年三月卅日　　口述者　瑞月識

第一篇　玉石混淆

第一章　神

風（一四七六）

青葉を渡る夏風の
心の玉國別司
伊太彦司を伴ひて
彼方此方に花蓮葉
いと芳しき香をば
御伴の神と仕へたる
尋ねんものと三人連れ
彼方此方と飛び越へて

清き音彦宣傳使
御空も清き眞純彦
稻田のそよぐ田圃道
所斑咲き亂れ
送り來るぞ床しけれ
三千彦司の行方をば
草鞋を濡らす田圃道
やう〳〵來るテルモンの

山の麓に着きにけり
テルモン山の中腹に
八重棚雲は神人が
但は神の出現か
大黒主の發祥地
探らんものと勇み立ち
平野を後にスタ〳〵と
アンブラック川の邊迄
こゝにも一つの平野あり
いと廣らかに展開し
空打仰ぎ眺むれば
靉靆き渡る紫の
集まり居ます象徴か
何は兎もあれバラモンの
つと立ち寄りて樣子をば
爪先上りの山道を
息喘まして登りつゝ
やうやく進み來りけり
數多の稻田は東西に
所々に蓮花

そよ吹く風に飜り
天國淨土の高原を
進むが如き思ひなり
こゝに三人の宣傳使
アンブラック川を打渉り
いよ〳〵靈地に着きければ
俄に起る鬨の聲
聞ゆゝ間もなく數百の
荒くれ男が現はれて
棍棒打振り石を投げ
三人に向つて攻め來る
其光景ぞ凄じき。
玉國別一行はアンブラック川を渡り一二丁前進する折しも惡酔怪の會長ワックスは數多の無頼漢を引率し、
ワックス『三五教の魔法使三千彦の同類現はれたり。今此時彼を亡ぼさゞれば此聖地は三五教に蹂躙されん。今が千騎一騎の場合だ。進め〳〵』

と采配振つて下知をなす。

岩窟の中へ閉ぢ込められて居たエキス、ヘルマンは之亦驢馬に跨り味方を三方に配置し、歌を歌つて僅か三人の敵に向つて潮の如く鶴翼の陣を張り遠巻に巻いて居る。そして小石を掴んで各自に投げつける。三人の身邊には石の雨篠つく如く寄り來り其危險名狀すべからず。　玉國別一行は突き出た巖の下陰に身を忍び、　一生懸命に天津祝詞を奏上し、天の數歌を聲を揃へて唱へ上げた。一同は遠巻に巻き乍ら相變らず石の雨を降らして居る。　伊太彦は尖つた石礫を向脛に負はされアッと云ふより早くその場に倒れた。此有樣を見た敵は益々勢を得、一生懸命に雨霰と石を投げつける。玉國別は泰然自若として頻りに數歌を奏上して居る。眞純彦は伊太彦を介抱し乍ら岩陰に伊太彦の體を忍ばせた。數百人の荒くれ男は太鼓を拍ち、擦鉦を鳴らし乍らチク〳〵と引網の如くに近寄り來る。伊太彦は餘りの痛さに顏を顰めて聲をも得出さず苦しんで居る。敵はおひ〳〵迫つて來た。流石の玉國別も進退維谷まり運を天に任し、眞純彦の背に伊太彦を負はせ危險を犯して敵の重圍を解き、血路を開いて逃げんと覺悟を極め敵中に野猪の如くに突進した。衆寡敵せず、三人は暫く間に打据ゑられた。かゝる處へ宙を飛んで駈け來る猛犬スマートは、「ウー、ウワッ〳〵」と二聲三聲叫ぶや否や、スマートに荒肝を取られた一同は、「強敵ムんなれ」と三人を捨て藪地に舘をさして兵士の應援を受けんと駈けり行く。

玉國別はスマートに向ひ一應謝辭を述べ、且頭を撫で背を撫で等して好意を謝して居る。スマートは嬉しげに尾を振り乍ら、伊太彦の傷所を見るより直に擦り寄つて傷所を嘗めた。忽ち血は止まり苦痛は頓に去り、漸くにして立つ事を得た。これよりスマー

トと共に三人は神舘を指して意氣揚々と宣傳歌を歌ひ乍ら急阪を登り行く。逃げ去つたるワックスは舘の前のバラモン軍の前に現はれ、頭を下げ手をつき涙を流して云ふワックス『バラモン軍の軍人樣、お願ひがムいます。只今三五教の魔法使が又もや三人現はれました。さうして猛惡なる狂犬が此靈地に横行しますれば何卒貴方等のお力を以て退却を、……否殲滅する樣お取計らひを願ひます。此神舘は先日來三五教の魔法使が只一人忍び込み種々雜多の惡事を致し、吾々バラモン信者を苦しめる事、一再ならず、然るに今亦三人の魔法使がアンブラック川を渉り、此方へ參りました以上は如何なる事を仕出かすか分りません。事の大きくならぬ中、何とか軍隊の力を以て殲滅させて下さい。吾々惡醉怪員一同はお後に從ひ充分の應援を致します』バラモン軍の軍曹イールは直ちに承諾の旨を答へ、ニコラスの承諾も得ず、五十の軍人を引き率れ、ワックスの一隊と共にテルモン山を下り、アンブラック川の邊に向ふ事となつた。

伊太彦は道々行軍歌を歌ひ乍ら進み行く。

伊太彦の歌、

伊太彦『神が表に現はれて　善と惡とを立分ける
此世を造りし神直日　心も廣き大直日
只何事も人の世は　直日に見直し聞き直す
三五教の宣傳使　玉國別に從ひて
心の色も眞純彦　足の傷所も伊太彦が
神の使のスマートに　危き處を助けられ

バラモン信徒の重圍をば
あゝ惟神々々
恵みの露のいや深き
感謝の涙に咽返る
月は盈つとも虧くるとも
誠の力は世を救ふ
誠一つを守り行く
敵する曲のあるべきぞ
テルモン山は高くとも
何か恐れん三五の
苦もなく解いて進み行く
神の力の偉大なる
今更乍ら有難く
朝日は照るとも曇るとも
假令大地は沈むとも
誠の道の宣傳使
大和男子の益良夫に
進めよ進めいざ進め
敵は幾萬ありとても
誠の道の宣傳使

神の試しに會ひ乍ら
獅子奮迅の勇氣をば
神の依さしの神業に
アゝ勇ましゝ〳〵
吾身の汗を拭ひつゝ
交へて横ぎる芳ばしさ
姿を隠し啼き立てる
行衛を尋ね探らんと
廣野を渡り川を越ち
俄に聞ゆる関の聲
心を磨き魂を錬り
完全に委曲に發揮して
仕へまつらん吾使命
夏野を渡る涼風は
蓮の花の香をば
山時鳥遠近に
神の教の三千彦が
吾師の君に從ひて
此方に進む折もあれ
何事ならんと岩蔭に

潜む間もなく四方より
棍棒打ふり石を投げ
石の礫は雨と降り
岩をば楯に戰へど
敵の矢玉に破られて
痛みに堪へず苦しめば
チクリ〳〵と近寄りて
眞純の彦に助けられ
血路を開き進まんと
危險を犯して飛び込めば

現はれ來る敵の影
その勢の凄じさ
進まん由もなき儘に
衆寡敵せず我脛は
無念乍らも打倒れ
弱目につけ込む敵の勢
早くも危殆に頻しけり
吾師の君と諸共に
群がる敵の眞中に
何條以て堪るべき

瞬く間に倒されて
現はれ來るスマートが
その言靈に辟易し
吾等を見捨て逃げて行く
神の力の偉大さよ
任せまつりし身なれども
心の網は弛べ得ず
神の館を目當とし
何處々々迄も進むべし
神に仕へし此體

無念の齒噛みなす時ゆ
天地も搖ぐ唸り聲
流石の敵も雲霞
ア、怖神々々
吾等は神に何事も
油斷大敵仲々に
四邊に眼配りつゝ
スマートさんと諸共に
神は吾等と倶にあり
假令命は失するとも

神素盞嗚の大神の　　任さし玉ひしメッセージ
盡さにや置かぬ益良夫の　　心の鏡はテラ〳〵と
三千世界に輝きて　　如何でか曇らん大和魂
ア、勇ましや〳〵　　大黒主が發祥の
靈地と高く聞ゐたる　　テルモン山の神館
一人も殘さず三五の　　誠の道を說き諭し
歸順させねば措くものか　　進めよ進めいざ進め
又もや敵の現はれて　　勢ひ猛く攻め來とも
神の惠みに包まれし　　吾師の君やスマートの
あります限り幾百の　　强き仇をも恐れんや

あゝ面白し〳〵　　神の惠みを願ぎ奉る
朝日は照るとも曇るとも　　月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも　　誠の力は世を救ふ
あゝ惟神　々々　　御靈幸はひましませよ」

と歌ひ乍ら無人の野を行く如く、ドシ〳〵と舘を指して進み行く。

宮町の十字街頭なる鐘路に着いた。俄に左右の家の中より矢を射かけ、三人は進退維谷まつて街頭に佇立し、一生懸命に數歌を歌つて居る。前方よりはバラモンの兵長槍を扱き乍ら進み來る。後よりは老若男女がワイ〳〵と鬨を作つて押寄せ來る。スマートは「ウワッ〳〵」と吠猛る。その聲は狼の如く戶障子を震動させ、一同の肝を痲痺させ、俄に矢の玉はピタンと止まつた。鬨の聲も一時聞ゐなくなつた。バラモン

軍の兵士は何思ひけん、舘の馬場をさして一目散に駈けり行く。

スマートは何處ともなく又もや姿を隱した。玉國別一行はバラモン軍の後を追ひ進み行く。

ワックスは又もや驢馬に跨り大音聲を張り上げ惡酔怪員を鞭撻して、三人の後を追つ駈け來り、馬場の前にて大衝突を初め遂には敵味方の區別もなく入り亂れ、バラモン軍とワックスの率ゆる惡酔怪員との爭鬪となつて了つた。

忽ち阿鼻叫喚の聲、劍戟の音、見るに忍びざる慘狀を呈した。玉國別は二人の宣傳使と共に表門を悠々と、此爭ひを後に眺めて進み入る。スマートは何處ともなく現はれ來り、門口より一生懸命に「ウワッ〳〵」と喚き立てゝ居る。

（大正一二、三、二八舊二、二、於菊生温泉濱屋、北村隆光錄）

第二章　多數尻（一四七七）

奥の一間には鬼國姫、ニコラス、三千彦、其外一同が打解けて神德話に餘念なく、茶を啜り乍ら懇親を結んでゐる。

かゝる處へ門前俄に騷がしく猛犬の叫び聲、合點行かぬと何れも耳を欹てたが、三千彦は一同に向ひ、

三千「皆さん、どうやら惡酔怪員の暴動と見ります。私が一寸調べて參りますから御休息して居て下さいませ」

と云ひ捨てゝ表に駈け出す。

ニコラスはハルナに命じ三千彦と共に表門に向はしめた。表門に行つて見れば三千

彦が晝夜念頭を離れざりし戀しき師の君玉國別、良友の眞純彦、伊太彦が莞爾として門内に滯り來るにパッと出會した。三千彦は倒れんばかりに且つ驚き且つ喜び、アッと云つたきり暫らくは言葉も出なかつた。

伊太「やア、お前は三千彦ぢやないか。俺等はお師匠樣と共に、どれ丈けお前を探して居つたか知れないのだ。處もあらうにバラモン教の聖場に納まりかへつて居るとは合點が行かぬ。これには何か樣子があるのだらう。さア早くお師匠樣に申上げんか」

三千彦は胸撫で下し、涙を流し乍ら、

三千「御師匠樣、よう無事で居て下さいました。貴方の所在を尋ねんものと、バラモン教の聖場に入り込み、種々雜多と苦勞を致しました。斯樣な所でお目にかゝるとは全く神樣の御引合せでムいます。さア奥へお通り下さいませ」

玉國「あ、三千彦殿、まア結構だつたな。隨分吾々三人はお前の身の上を案じて居たのだ。只今無事な顏を見て、こんな嬉しい事はない。然し此通りバラモン軍と無賴漢との同志打ちが初まつてるが、もとは吾々一行に對しての挑戰であつたが、何時の間にか相手が變つて味方の同志打ちとなつた。實に氣の毒だから之を一先づ鎭撫せなくてはなるまい。緩り奥で休息する譯にも行かんぢやないか」

三千「決して御心配なさいますな。スマートさんに一任して置けば大丈夫ですよ。アハ、、、」

眞純「うん、そらさうだ。吾々四人の宣傳使よりも餘程神力が備はつて居るのだからな四足だつて餘り馬鹿に出來んぢやないか。吾々はスマート大明神のお蔭で命が助かつたのだ。アハ、、、、」

と笑ひ乍ら三千彦に案内されて奥の間を指して進み入る。

ハンナは部下の兵士が無頼漢と入り亂れて戰つて居るのを見逃す譯にも行かず、直ちに驢馬に跨り兩方混戰の中に駈け入つて聲を嗄らし「鎭まれ〳〵」と嚴しき下知を傳へた。

此聲を聞くより敵味方ともに水を打つたる如くピタンと戰鬪は停止された。スマートは忽ち駈け來り、ワックス、エキス、ヘルマン、エルの四人を探し索めて引倒し、ハンナの前に一々引き來りワン〳〵と叫んで、之を縛れよとの意を示した。ハンナは四人を手早く縛し上げ、馬場の前の大杭にシカと縛りつけた。弱きを挫き强きに從ふ惡醉怪員は會則を遵守して一人も殘さず、コソ〳〵と己が家路に歸り行く。トンクは驢馬に跨つた儘、十字街頭の鐘路に現はれ、驢病風に誘はれた數多の老若男女を集めて一場の訓戒演說を初めて居る。

トンク『御一同樣の中には惡醉怪員も水平怪員も、其他町內有志諸君も居られますが、よくまア會則を遵守し、一人も殘らず退却して下さいました。實に幹部たる吾々は諸君の行動に對し、欣幸措く能はざる所でムいます。今日迄は神舘には只一人の魔法使三千彦と云ふ大先生、並びに求道居士の二人の魔法使、それ故吾々一同に比較すれば先方は弱者でムいました。併し乍いもはや今日は新に三人の魔法使の大先生が御出現遊ばされ、又武器を携へたニコラスキャプテンが五十の兵士を引率して舘を固くお守りになり、三五教の魔法使と同盟遊ばした上は、忽ち地位轉倒して先方は强者となり、吾々は弱者の地位に立たねばならなくなりました。加ふるにスマートと云ふ、あの猛犬大明神は仲々の强者でムいます。併し乍ら弱者は弱者として獨

立する譯にはゆきませぬ。會則にある通り、弱きを挫き、強きに從ふのが吾々の本領でムいます。それ故吾々一同は神館に至り心から歸順致し、馬場に繫ぎあるワックス等に大痛棒を加へ天晴融通を利かし、三五敎及びバラモン軍に歸順の誠を現はし、身の安全を圖るを以て第一と心得ます。皆さんの御意見は如何でムいますか」と呼はつた。惡酔怪員を初め、その他の連中はトンクの詭辯に何れも感心し、一も二もなく手を拍つて贊意を表した。トンクは此態を見て威猛高になり、

トンク「皆さん、早速の御承知、トンク身にとり滿足に存じます。就てはワックスの會長を皆樣より免じ、新に强者を會長に任命されん事を希望致します。その强者とは申す迄もなく私はトンクだと思ひます。トンクに御贊成の方は手を拍つて下さい。不贊成の方は背を向けて尻を捲つて下さい。何事も多數決でムいますから」

手を拍つもの半分、尻を捲つて背をそむけるもの半分、トンクは馬上より之を眺めて、

トンク「皆さん、手を拍つて下さる方が半分、尻を捲つて反對を表する方が半分と見ます。これではハンケツがつきません。何とか、も一度考へ直して頂き度うムいます」

此聲と共に今度は一人も殘らず黑い尻を捲つてトンクの方に向けた。さうして群集の中より「卽ケツ否ケツ」と叫ぶものがある。トンクは馬上より齒ぎしりをし乍ら、

トンク「エー、尻太巽な事だな」

斯かる所へ驢馬に跨りチョク〳〵と此場に現はれ來たのはタンクであつた。タンクはトランクの口を開き、金銀の小玉を掴んでは投げ、掴んでは投げ、

タンク「皆さん、私が悪酔怪の怪長の候補者でムいます。今黄白を斯くの通り撒き散らしますから十分拾得競争をやつて下さい。拾得された方は其方の所有でムいます。其代り神聖なる一票を此タンクにお與へ下されん事を希望致します」

と掴んでは投げ、掴んでは投げ、前後左右に駒を進めて殘らず萬遍なく撒き散らして了つた。トンクも手早く馬から下り矢庭に金銀の小玉を拾つては懐中につゝ込み、再び馬上につゝ立ち選擧の樣子を覗望して居る。タンクは全部黄白を撒き散らし、もはや缺けたカンヅも無くなつて居た。タンクは馬上より雷聲を張り上げ、

タンク「皆さん、私を怪長に選擧して下さいますまいか。贊成の方は手を拍つて下さい萬一不贊成のお方は尻を捲つて屁を一發手向けて頂き度い。何程お尻を捲られても屁の出ない方は贊成と認めます」

とうまく孫吳の屁法で豫防線を張つて了つた。こゝに半分は手を拍ち半分は尻を捲らず、手も拍たず、茫然として控へて居る。タンクは怪訝な顏して馬上より樣子を窺つて居た。此時トンクはタンクの撒いた金銀を馬上より見せびらかし乍ら、

トンク「皆さん、最前手を拍つて下さつたお方は私の贊成者と認めます。今タンクさんに對して手を拍たず、尻を向けない方は中立者と認めます。その方に對し此黄白を撒ずる考へですから贊成の方は手を拍つて下さい。今こゝで撒き散らしますと、二重取りされると折角の贊成者の手に入りませぬから、私の宅でお渡しゝませう。少くとも千兩の金はありますから百人に分配しても十兩づゝは確でムいます。さア一二、三で願ひます」

今度は如何したものか、一人も殘らず尻を捲つて口屁をブウ〳〵と鳴らして居る。

中には尻から黒い濕つぽい輪廓の不完全な煙を吐き出す奴も少しはあつた。

トンク『然らば拙者が副怪長となり、タンクさんを怪長に選んで下さい。さうすれば双方共顔が立ちますから』

大勢の中から、

「オーイ、トンク、貴樣の今持つてる金は皆タンクさんの撒いた金だ。副怪長に任じて欲しけりや皆バラ撒くのだ。そしたら副怪長にしてやらう」

トンク『成程然らば皆さんに撒き散らしますから、よう拾はない人は運命だと諦めて下さい。兎も角半數者以上の賛成があれば可いのです』

と懐より一つも殘らず取り出し、前後左右にまき散らして了つた。此潮時を見濟ましし、タンクは大音聲、

タンク『皆さん、私を怪長に選んで下さつた事を有難く感謝します。何と云つても運動費が無くては今日の世の中は駄目です。墓標議員の事故議員、妥協議員にならうと思つても、五万や十万の金が入る時節ですから、無一文で議員にならう等とは餘り虫が良すぎます。私は副怪長なんかは必要はないと思ひます。官の爲人を選むのでなく、人の爲に官を作ると云ふ事は最も不利益且つ不經濟、秩序紊亂の端緒を開くもの私は副怪長の必要はないと思ひます。皆さん、必要と認めた方は手を拍つて下さい不必要と認めた方は、も一度尻を捲つてトンクさんの方へ見せて下さい。それを以て貴方等の意志を明かに致します』

一同は一人も殘らず眞黒の尻を捲つてトンクの方へ尻をさし向け、御叮嚀にピシャ〳〵と黒い臀肉を叩いて見せた。トンクはスゴ〳〵と驢馬の尻を無性矢鱈に叩き、業

腹煮やして何處ともなく姿を隠した。

これよりタンクは大勢の前に立ち凱旋歌を歌ひ乍ら神舘をさして練り込んで行く。

大勢は擦鉦を叩き、歌に合せて拍子をとり跟いて行く。

「扨ても悪酔怪員は　弱きを挫き強者には
恐れて従ふ卑怯者　平安無事が第一だ
強い奴にはドッと逃げ　弱い奴にはドッと行け
これが軍の駈引だ　チャンチキ〳〵チャンチキチン
いや〳〵軍のみでない　萬事萬端その通り
どんな商賣致しても　小さい店を踏み倒し
小さい資本の會社をば　片ッ端から押し倒し
大きな奴には尾を巻いて　暫らく忍び時を待ち
いつとはなしに強くなり　大きくなつたその時に
己が所信を貫徹し　世界の強者と崇められ
優勝劣敗經となし　弱肉強食緯として
此世を渡るが利口者　チャンチキ〳〵チャンチキチン
神の舘に現ませる　三五教の魔法使
三千彦さんは弱いとは　云へど其實強い人
神變不思議の魔法をば　使つて吾等を苦しめつ
何處々々迄もやり通す　こんなお方に逆らうて
どうして吾身が立つものか　チャンチキ〳〵チャンチキチン

弱きを挫き強きをば　助ける吾々怪員は
ワックス、エキス、ヘルマンや　エルの司を虐げて
惡醉怪の至誠をば　現はし舘に立向ひ
そこはそれ〳〵都合よく　頭を下げて胡麻を摺り
身の安全を圖るのだ　こんな神謀鬼策をば
もしもトンクが怪長なら　どうして捻り出されよか
智慧の袋のタンクさん　神謀鬼策の妙案は
胸の袋にタンク山に　藏つて仏るぞ皆さんよ
心を丈夫に持つが良い　チャンチキ〳〵チャンチキチン
早くも馬場に近づいた　皆さん聲を打揃へ

三五教やバラモンの　神の司の萬歳を
こゝから唱へ上げませう　それに續いてスマートの
犬大明神の萬歳を　三唱し乍ら進みませう
チャンチキ〳〵チャンチキチン　あゝ惟神　々々
叶はんから〳〵　目玉飛び出しましませよ
朝日は照るとも曇るとも　月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも　強きを助け弱きをば
挫くが天地の道理ぞや　大魚は小魚を呑み喰ひ
大獣は小獣を嚙み喰ひ　強者は弱者を虐げる
富者は貧者をこき使ひ　役人さんは平民を

奴隷の如く足にかけ　　腮をしやくつて使ふのだ
これが天地の道理ぞや　　必ず迷ふちやならないぞ
チャンチキ〳〵チャンチキチン』
と勝手な熱を吹き悠々として驢馬に跨り、先頭に立ち早くも門内に進み入る。

（大正一二、三、二八、舊二、一二。於皆生温泉濱屋・北村隆光談）

瑞月

聖場も自然愛なる道の爲に
汚されんとす淺間しの世や

第三章　怪

清き心の玉國別は
足を傷づく伊太彦の
天津日影もテルモンの
神の使のスマートに
老若男女の叫び聲
立ち現はれし三千彦は
焦れ慕ふた師の君や
嬉しさ餘り胸迫り

散（一四七八）

夏の御空の眞純彦
二人の弟子を伴ひて
珍の舘の表門
守られながら進み入る
矢叫びの音に驚いて
表の門の入口に
二人の友に廻り會ひ
何の應答も泣く許り

漸く心取り直し　奥の一間に靜々と
三人を伴ひ進み入る　鬼國姫を初めとし
デビスの姫やケリナ姫　バラモン教の神司
ニコラスキャプテン初めとし　求道居士やヘル司
マリス、リーベナ、ルイキン、ポリト　バットを初め四五人の
僕と共に控へ居る　鬼國姫は三人の
姿を見るより喜びて　其坐を下り手を支へ
よくこそお出下さつた　貴方は三千彦宣傳使
救ひの神の師匠樣　まあ〳〵これへと請ずれば
玉國別は目禮し　其言の葉に從ひて

設けの席につきにける。

鬼國姫『此處はバラモン教の神館、大黒主樣の發祥の地、其お館を守る我々夫婦、いろ〳〵と禍の神に見舞はれ、煩悶苦惱の最中へ貴方のお弟子三千彦樣がお出下さいまして、我々一同の難儀をお救け下さいました。其膽力と義俠心に對し、感謝の涙を零して居ります。何卒今後はお見捨てなく宜敷くお願ひ致します。又、この求道居士は元は、バラモン教のカーネルさん、治國別樣のお言葉に感じ比丘となり三五教のお道をお開きなさる道すがら、私の娘二人の危難をお救ひ下さつた御恩人でムいます、何ともお禮の申やうがムいません』

玉國『それは〳〵、結構なお神德を頂かれました。お目出度う存じます。そして貴方は求道居士樣ですか、よくまア入信なさいました』

求道「ハイ、私はバラモン軍のカーネル、エミシと申すもの、鬼春別、久米彦將軍に從ひ浮木の森迄進軍致し、河鹿峠の味方の敗戰によりビクの國迄退陣致し、此處を又立ち出て、猪倉山の岩窟に要塞を構へ、難攻不落と誇つて居る所へ治國別樣がお越になり、神樣の道をお諭し下さいましてから、飜然として悟り、今は三五教の信者となり、御神業に奉仕さして頂いて居ます。足はぬ某、何卒厚き御指導をお願ひ申ます」

玉國「お互に手を引き合うて、御用に立てさせて頂きませう」

求道「此處に見ゐて居る七人の方は、バラモン軍の、ニコラスと云ふ、キャプテンでムいます、其他の六人は何れも下士官でムいますが、鬼春別將軍の變心及び其後の模樣を調査すべく、先刻この舘に御出張になり、我々の話を聞いて、漸く贊成を下さつた所です、何卒宜敷く御指導を願ひ上げます」

玉國「何分お互に宜敷く願ひませう。あゝ、貴方がニコラス樣でムいますか。や、御一同樣初めてお目にかゝります。世の中には敵もなければ味方もムいません、同じ神樣に育まれて居る我々人間は互に仲よくせねばなりませんからなア」

ニコラス以下六人はハッと頭を下げ、

「何分宜敷くお願ひ申ます」

と心の底より挨拶をする。斯る所に門前俄に騷がしく摺鉦の音、大聲に歌ふ聲聞ゐ來る。三千彦はッと立つて何事ならんと表門に出た。スマートは嚴然として門を守つて居る。惡酔怪長タンクは先に立ちて進み來り、三千彦に向ひ揉手をしながら、米搗バッタのやうにピョコ〳〵と腰を折り頭を下げ、媚を呈し乍ら、

タンク『エ、、これは〳〵、三五教の大宣傳使、神力無双の三千彦様でムいますか。まアよく遙々と神舘にお出下さいまして、舘の危難をお救ひ下さり、これの舘の黒雲を除き、天下泰平にお治め下さいました段、宮町一同は申すに及ばず、國民一同の感謝措かざる所です。私は天下の無頼漢、イヤ、オットドッコイ無頼漢を懲す、悪酔怪の怪長タンクと云ふケチナ野郎でムいます。怪員一同に代り、貴方の御高徳を感謝する爲に罷りつん出ました。スマート様にもそれは〳〵何とも云へぬ御盡力に預りまして有難う存じます。ワックス、ヘルマン、エキス、エルの悪人原が集まりまして如意寶珠の玉を盗むやら、家々の寶を盗むやら騒動をおつ始め、どうとも斯うとも ならない難儀で御坐いましたが、貴方様のお出以來、風塵治まり、天下泰平の端緒を得ましたのは、私等の扑舞措く能はざる所です。何卒我々の至誠をお認め下さいまして、今後御贔屓下さるやうお願ひ致します。此の通り數多の町民が參りましたのも皆、貴方の御高徳を感謝せん爲に參上致しましたのでムいますから、何卒宜敷く可愛がつて頂き度うムいます』

三千『ヤア夫は結構だ。我々に對する誤解が解けましたかな。今後は互に手を引きやうて、お舘のため、お國のため協力一致、誠を捧げられん事を祈ります。併し乍ら、かう大勢舘へ入り込まれましては鬼國別様も御病中なり、御迷惑をせられませうから、門前の馬場にてお目にかゝりませう』

と、スマートを引き連れ門を出で、階段を下り草青き馬場に出立ち見れば、五十の兵士は列を正し、ワックス外四人を縛したまゝ、警護して居る。軍人側と、悪酔怪側とはいつしか和睦が出來たと見て互にニコ〳〵笑つて居る。タンクは再び驢馬に跨り、ワッ

クス外三人の前に馬を留め大音聲にて演説を初めかけた。三千彦は麗しき赤、白、黄紫のデリケートの花の咲き滿ちた青芝の上に腰を下ろし、スマートの頭を撫で乍らニコ〳〵として控へて居る。

タンク『そも〳〵此處に繫がれし　テルモン山の神舘
荒し廻りしリックスや　其外三人の惡漢は
大黑主の御寶　如意の寶珠を横奪し
舘の主を苦しめて　ギウ〳〵云はせ我戀の
野望を甘く達せんと　所在手段を廻らして
惡の限りを盡したる　極惡無道の痴漢ぞ
三五教の神使　三千彦さんの威に打たれ
如何ともする術もなく　首も廻らぬ苦しさに
魔法使と布令廻し　我々一同町民を
甘く僞り暴動を　起させたるぞ憎らしき
此宮町の町民は　テルモン山の靈地をば
堅磐常磐によく守り　天地の神の御惠に
報ひん爲に赤誠を　力限りに盡すのみ
知らぬが佛の町民は　家令の悴ワックスが
企みの罠におとされて　神力無双の神人に
乃向ひ奉りし愚さよ　惡に長けたるワックスは
我身の罪を蔽はんと　茲に一計案出し

惡醉怪を組織して
助けんものと主張しつ
造りて誠の神人を
占領せんと企みたる
天罰忽ち報ひ來て
手もなく體を縛られて
恥を晒すぞ可笑しけれ
誠の神はいつ迄も
我等はタンクと云ふ男
やつと選まれ長となり
弱きを挫き强きをば
數百餘人の團體を
惱まし奉り神館
其惡計ぞ怖ろしき
己が率ゆる怪員に
これの馬場に萬世の
あゝ惟神々々
惡の企を許さんや
六百人の町民に
今又茲に惡醉怪の

頭とおされ町民を
神の司の御前に
御國の爲に盡さんと
赦させたまへ惟神
此世を造りし神直日
唯何事も人の世は
身の過は宜り直せ
三千彦司の前なれど
これの聖地を朝夕に
必ず許し給ふ無く
代表なして三五の
誠の心を顯彰し
衆を率きつれ來りたり
神かけ念じ奉る
心も廣き大直日
直日に見直せ聞き直せ
三五教の宣傳使
これに繫ぎし四人連れ
掻き亂し行く曲者ぞ
嚴しき笞を加へつゝ

これの聖地を追ひ出し　懲しめたまへ惟神
六百人になり代り　更め願ひ奉る
あゝ惟神々々　御霊幸倍ましませよ
かゝる惡魔の聖場に　姿を見する其内は
如何なる神の御恵も　如何なる誡の御教も
如何で開けん常闇の　世は追ひ〳〵と曇るのみ
あゝ願はくば三千彦の　誡の教の宣傳使
我等の願を逸早く　聞き取りたまひ片時も
早く聖地を追ひ出し　これの霊地の禍を
除かせ給へと願ぎまつる　あゝ惟神々々、

御霊幸倍ましませよ」

と歌をもつて演説に代へ、且つ三千彦に向ひ、是等四人の惡黨を一時も早く此聖場より追放されん事を祈つた。惡酔怪員一同は、一齊に手を打つてタンクの説に賛成の意を表した。三千彦は歌をもつて之に答ふ、

三千彦「世は常闇となり果てゝ　惡魔は天下を横行し
吹き來る風は腥く　絶ゆる間のなき人馬の音
拂はんよしもなきまゝに　難み苦しむ宮町の
老若男女の心根は　今更思ひ知られけり
テルモン山の峰清く　蓮華の花は四方八方に
芳香薫じ夏風に　搖られて御代の泰平を

謳へど神の御舘
包まれたまひ神柱
其外二人の乙女達
家令の怜ワックスが
持ち倦みます時もあれ
救ひの神と現はれし
心を痛め種々の
神の舘を包みたる
旭の豐阪登るごと
あゝ惟神々々

日毎夜毎に憂愁に
鬼國別や姫命
其身の不覺を歎きつゝ
醜の猛びに敵し得ず
神の御言を蒙りて
三千彦司は身を碎き
難みに會いて漸うに
醜の雲霧吹き拂ひ
漸く生れ代りけり
神の御稜威の著く

惠の露の深きをば
玉の所在も漸くに
上を下へと歡ぎつつ
さはさりながら團体の
惡酔怪の綱領は
助くるよしに聞き及ぶ
天地の神の御心に
いと速に改めて
誠一つの三五の
我等も共に手を引いて

喜び祝ひ奉り
現はれまして神館
元の姿となりにけり
長とあれますタンクさん
弱きを挫き強きをば
惡魔に等しき團體は
背反したる暴擧ぞや
此團體を解散し
教の道に歸順せば
これの聖地を守るべし

願みたまへ惟神　神の御前に赤心を
捧げて茲に願ぎまつる　旭は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも　假令大地は沈むとも
誠の力は世を救ふ　誠の道に皆來れ
惡醉怪の目的は　決して世の爲め人の爲め
利益となるべきものでなし　否々却て世を汚し
大混亂の種ぞかし　願み給へタンクさん
其外會員御一同　三五教の三千彦が
心を籠めて宣りまつる　あゝ惟神々々
御靈幸倍ましませよ」

タンク「いざさらば君の教に從ひて
これの集團を解き放ちなん。
この集團我等一同の心より
出でしに非ずワックスの旨。
ワックスの百の企みの現はれし
上は尙更何の要なき。
弱きをば挫き强きを助くるは
曲津の神の仕業なるらん」
三千彦「健氣なるタンクの君の言の葉は
誠の神の御聲とぞ思ふ。

いざ早く曲の集團を解きほぐき
　神の御前に赤心さゝげよ」

かく歌を取り交し、和氣靄々として茲に惡酔怪の解散をなし、町民一同打ち揃ひ、神舘に恭しく詣でて感謝祈願の言葉を奏上した。中空には微妙の音樂聞ゑ、天津乙女の姿二つ三つ嬉しげに舞ひ狂ひ、優曇華の花瓣風に翻り、各人の頭にパラリ〳〵と落ち來る。あゝ惟神　靈幸倍坐世。

（大正一二、三、二八、舊二、一二、於皆生温泉濱屋、加藤明子錄）

第四章　銅盥（一四七九）

タンクの會長は三千彦と相談の結果、惡酔怪を解散し神舘の神殿に一同參拜し感謝祈願の祝詞を奏上し了つた。日は已に暮れて暗の帳はボト〳〵とテルモン山の麓より下ろされて來た。數百の會員並に町民一同はワックス以下の惡漢に誤魔化され、思はぬ暴動をつゞけ大神の道に背きたる事を悔ひ、且つ懲戒の爲ワックス以下四人に笞を加へ追放せん事を主張して止まなかつた。三千彦は種々言葉を盡し、其不合理を責た。併し乍ら此町の昔からの不文律、俄に破る譯には行かぬと云ふので三千彦も止むを得ず笞刑を許した。笞打つ役はトンク、タンクの二人が當つた。ワックスには一千の笞、其外の連中には五百づつの笞を加へて放逐する事となつた。四人は杭に後向

きに繋がれ、竹の根節の笞にて力限りに打たれる事となつた。三千彦は暗夜を幸ひ、四人の尻に鍋の金盥を括りつけ、素知らぬ顔して居た。タンク、トンク兩人は少しも覺らず松明をドン〳〵焚き乍らソロ〳〵笞を打ち初めた。一同は拍子をとつて之に和す。銅の盥の上には着物がかゝつて居るから何程松明の火が明くても容易に誰の目にもつかなかつた。タンクは笞を振り上げ一節歌つてはワックスの尻をピシャと毆る。其度毎にカンと妙な音がする。トンクはエキスの尻を目蒐けてピシャと打つ。これ亦カンと鳴る。

「テルモン山の神舘　珍の聖地に仕へたる
ヨーイ〳〵ドンと打て　カーン〳〵
アイタ、〳〵アイタタッタ　家令の怜ワックスは
古今無双の惡黨者　エキス、ヘルマン、エルの奴
うまく騙かし如意寶珠　舘の寶を盗み出し
ヨーイ〳〵ドンと打て　カーン〳〵
アイタ、〳〵アイタタッタ　鬼國別の御夫婦に
あらぬ難題塗りつけて　せつぱつまつたその擧句
自分のラブした姫さんを　うまく手に入れ御養子と
ならうと致した惡漢だ　ヨーイ〳〵ドンと打て
カーン〳〵　アイタ、〳〵アイタタッタ
此世に神のます限り　惡は何時迄つゞかない
蜴の樣な面をして　色の戀のと何の事

色と慾との二道を
馬鹿を盡すも程がある
カーン〳〵
此奴の尻はどうしてか
怪体な音がするぢやないか
お尻の皮まで厚いのか
カーン〳〵
三千彦さんの神司
助けてやれと仰有つた
さはさり乍ら昔から
かけた家令の小忰奴
ヨーイ〳〵ドンと打て
アイタ、〳〵アイタタッタ
笞打つ度にカン〳〵と
面の皮まで厚い奴
ヨーイ〳〵ドンと打て
アイタ、〳〵アイタタッタ
野蠻な事は止めにして
それも一應尤もだ
きまつた所刑を今となり

どうして廢止がなるものか
お尻の皮が剝けるまで
カーン〳〵
こりや〳〵ワックス初めとし
もう斯うなれば是非がない
お尻の肉が取れる迄
今迄騙し苦しめた
ヨーイ〳〵ドンと打て
アイタ、〳〵アイタタッタ
テルモン山の神館
打たねばならぬ四人連れ
ヨーイ〳〵ドンと打て
アイタ、〳〵アイタタッタ
エキス、ヘルマン、エルの奴
十分覺悟を相定め
打つて貰つて俺等を
罪の償ひするがよい
カーン〳〵
お前がこゝを去つたなら
宮町中は餅搗いて

ポン〳〵と勇み立ち
惡醉怪を組織して
神の使の三千彡を
占領せんとの惡企み
ヨーイ〳〵ドンと打て
アイタ、〳〵アイタタッタ
觀音さんでもあるまいに
餘程因果な生れつき
水平會や町民に
笞刑の恥を曝すとは

平和に其日を送るだろ
吾等一同を抱き込み
苦しめまつりお舘を
いつ迄神は許さんぞ
カーン〳〵
此奴のお尻は澁太いな
カン〳〵〳〵と音がする
家令の悴と生れ來て
聲を揃へて唄はれて
憎い乍らもお氣の毒

これも規則だ仕樣がない
ヨーイ〳〵ドンと打て
アイタ、〳〵アイタタッタ
デビスの姫やケリナ姫
生命を助けて下さつた
狐に狸の化物と
鳩の岩窟に放り込んで
種々雜多と辭を設け
買つて天晴色男
目尻を下げて出でゝ行く

涙を呑んで辛抱せよ
カーン〳〵
ほんとに厄介な者だなア
尊い〳〵お姫樣
求道居士の修驗者
うまく俺等を騙かして
夜な〳〵自分が通ひ込み
二人の姫の歡心を
鼻毛をよまれ涎くり
そのスタイルが見たかつた

ヨーイ〳〵ドンと打て
アイタ、〳〵アイタタッタ
喰つた其上スマートに
半死半生と成り果て、
自業自得と諦めて
きつい笞をば受けなされ
痛い苦しい其味は
それでも以後の懲戒だ
止むに止まれぬ尻叩く
カーン〳〵

カーン〳〵
二人のナイスに肱鐵を
腕をば咬まれ足嚙まれ
血まぶれ姿の憐れさよ
町民一同の志
俺等もヤッパリ人間だ
決して知らぬ者ぢやない
涙を呑んで尻叩く
ヨーイ〳〵ドンと打て
アイタ、〳〵アイタタッタ

斯うなりやお前ち金盥
餘程お尻が腫たゞろ
たつた五百や一千の
吠面かわく奴があるか
頭となつた男ぞや
誇つて厶つたワックスよ
相も變らず無頼漢
規則通りにカン〳〵と
萬劫末代名が殘る
カーン〳〵

叩いた樣な音がする
痛いとて辛抱するが宜い
笞を受けてメソ〳〵と
お前も一度は團体の
男の中の男ぞと
それに從ふ三人連れ
お氣の毒だがもう暫し
神妙に打たれて置きなされ
ヨーイ〳〵ドンと打て
アイタ、〳〵アイタタッタ

惡酔怪の會長と
神力無双のタンクさん
あんまり強う叩かねど
軟かい尻を叩くのに
こりや又如何した事だらう
カーン〳〵
落選したるトンクさん
竹の根節を振り上げて
ヤッパリこれも腕力
打つ度毎にカン〳〵と

町民諸君に選まれた
此方の腕には骨がある
力が充ちて居ると見ね
カン〳〵〳〵と音がする
ヨーイ〳〵ドンと打て
アイタ、〳〵アイタタッタ
ヤッパリ俺と同じ樣に
エキスの尻を打叩く
備はり居ると見ねまして
怪体な音が響いてゐる

尻觀音か知らねども
最早貴目は保たれぬ
カンツク〳〵カンツクカン
ボンボラ坊主の四つの尻
カーン〳〵
何程尻を叩いても
涙一つも零さない
餘程肝の太い奴
思ふが儘に占領して
デビスの姫に目をかけて

何程カン〳〵云つたとて
カンカラカンのカンカラカン
カン〳〵ベラボウ、ポンボラボウ
ヨーイ〳〵ドンと打て
アイタ、〳〵アイタタッタ
痛い〳〵と云ふ計り
クス〳〵〳〵と笑つてる
これを思へば神館
天下無双の美人なる
思惑立てたは當然

ホンに圖太い奴だな　　此奴の尻は不死身だらう
何程打つてやつたとて　　チッとも往生致さない
打てよ打て〳〵確り打てよ　　ヨーイ〳〵ドンと打て
カーン〳〵　　アイタ、〳〵アイタタッタ」

トンク「さあエキスの分は濟んだ。これからヘルマンだ。おい、ヘルマン無情な奴と怨めて呉れな。これも貴樣の心から出た錆だから仕方がないわ。尻の結目の合はん事するからシリが來るのだ。それだから俺もお前等のシリ合だけれど此町の規則によつて尻を打たねばならぬ破目となつたのだ。惡い事をするなら何故もつと尻を結んで置かないのだ。シリ滅裂の計畫をやるものだから到頭終ひの尻は町民に笞刑五百と判ケッされてこんなケッい目に會ふのだ。然しまあケッ構と思へ、命とられぬ丈ケッ構だから。お姫樣をケッねだの、狸だのと吐した酬いでケッ構な目に遭はなならぬのだから觀念するがよいわ。いやもうカン念してるに相違ない。エキス、ワックスはカン念〳〵と云つて居る。何分尻迄物云ふ時代だから馬鹿にならんわい。これから俺が音頭とるのだ。さア辛抱せい。ワックスはまだ半分殘つてる。これを思へば貴樣は半分で濟むのだからケッ構だぞ。

「ヨーイ〳〵ドンと打て　　カーン〳〵
アイタ、〳〵アイタタッタ　　家令の舘へ押掛て
チョコ〳〵サイ〳〵金銀の　　小玉をドッサリ强請りとり
うまい汁をば吸ひよつた　　その証にや尻までが
ブク〳〵太つてケッからア　　さア〳〵痛うても辛抱せよ

俺も涙は零してる
こんな役目を勤むるは
止むにやまれぬ此場合
カーン〳〵
此奴の尻ち亦不思議
顏に被つた鐵面皮
手詰になつた此場合
宮町中の怨靈が
此ケッ斷になつたのだ
打たねばならぬ此場合

現在互に識つた仲
俺も嬉しうはないけれど
ヨーイ〳〵ドンと打て
アイタ、〳〵アイタタッタ
又々カン〳〵唸り出す
此奴は尻まで鐵面だ
いやでも打たねばならうまい
お前の尻に集まつて
お前も決心するが宜い
ヨーイ〳〵ドンと打て

カーン〳〵
これから此處を立出で、
テルモン山を後にして
デカタン高原さして行け
澤山集つて居ると云ふ
又もや惡事を企み出し
必ず掛るに違ひない
ヨーイ〳〵ドンと打て
アイタ、〳〵アイタタッタ」
漸くにして規則通り四人は數百人に聲を揃へて囃され乍ら尻を打たれた擧句、縛

アイタ、〳〵アイタタッタ
荒野ケ原を打渉り
運も命も月の國
お前によう似た惡人が
此靈場に置くならば
我等一同に難儀をば
氣の毒乍ら打つてやらう
カーン〳〵

を解かれて、夜陰に紛れ逃げ出す途端、金盥はガラン〳〵と音をして芝生の上に仰天してキラ〳〵と篝火に輝いて居る。

トンク「やア、餘り強く打つたので尻に血が凝つたので、斯んな大きな肉塊を落して行つた」

とよく〳〵見れば四つの金盥が大きな口を開けて天を眺めて居る。

トンク「ハハア、皆さん、これ御覽なさいませ。何がカン〳〵云ふかと思へば四人の奴の尻は此通り金になつて了ひました。ヤッパリ餘り金を使つた天罰でせう」

一同はタンク、トンクの兩人が兩方の手に金盥を一つづゝ捧て來て見せるのを不思議相に「ワーイ〳〵」と叫んで

「溜飲が下つた、胸がスッとした。これで飯がうまい。歸んで一杯やらうかい」

と口々に囁き乍ら各我家を指して歸り行く。タンク、トンクの兩人は無事笞刑の濟んだのを報告すべく金盥を四つ、各自に抱へて神館の大神殿に進み入り、恭しく呈上した。三千彦は此場に現はれ來り、

三千「タンクさん、トンクさん、御苦勞でムいました。四人は嘸弱つたでせうな」

タンク「はい、何だか知りませぬが餘り打つたものですから、此通り尻が硬くなり、血が滲んで尻の凝固を落して逃げました。然し隨分元氣よく何處かへ逃げましたよ。

アハヽヽヽ」

タンク「三千彦の神の司の慈み

尻に鎧を着せ玉ひけり」

トンク「金盥とは知り乍ら大神の

恵嬉しみ打据ゑにける」

三千彦「大神の恵の露を負ひし身は
如何でか人を損ひ得べき。
皇神も二人の司の誠心を
さぞ喜びて諾ひまさん」

（大正一二、三、二八、舊二、二二、於皆生温泉濱屋、北村隆光録）

瑞月

如何にしてこの赤心にむくゐんと
思へど詮なき籠の鳥かな

第五章　潔

テルモン山の神舘　　青葉の茂る庭園に
咲き誇りたる花菖蒲　　青紫や白黄色
所狭まで燕子花　　咲き匂ひたる床しさよ
バインの枝は涼風に　　吹かれて自然の音樂を
奏でゝ舞踏を演じつゝ　　至治泰平の瑞祥を
現はし居るこそ目出度けれ　　常磐の松の青々と
緑ものびて玉の露　　風吹く毎にパタ〳〵と
金砂銀砂の上に落つ　　三五教の宣傳使

別（一四八〇）

恵の露を浴びながら
別の命を初めとし
バラモン教のキャプテンが
膝を交へて奥の間に
天地の恵を嬉しみて
語り出づるも神ながら
外に言葉は荒風の
天國淨土の眞相を
あゝ惟神々〳〵
三五教やバラモンの
進んで來りし玉國の
比丘の姿の求道居士
伴ひ來る下士官と
涼しき風を入れながら
心の隔て相はづし
誠の道の教より
青野を渡る有様に
今日の當り見る如し
神の恵の幸はひて
教の區別を取り拂ひ
旭も清くテルモンの
築き初めしぞ尊けれ
神の舘に仇なせる
エルの司を追放し
悠々歸り坐につけば
汝三千彦神司
老若男女の叫び聲
その顚末を詳細に
三千彦兩手をつき乍ら
山の麓に樂園を
茲に三千彦宣傳使
ワックス、エキス、ヘルマンや
タンク、トンクを伴ひて
玉國別は聲をかけ
舘の前の馬場にて
御空を焦す篝火の
宣らせたまへと促せば
恭しくも答へける

○

「月の都に現ませる
古　此處に在しまして
開き給ひし靈場の
珍の寶を奉齋し
教司に相命じ
オールスチンの悴なる
野心を充す其爲に
使嗾なしつゝ奥殿に
深く我家の床下に
其心根の醜さよ
大黒主の神柱
バラモン教の御教を
紀念となして如意寶珠
館の主人二柱
固く守らせ給ひしが
頑迷愚鈍のワックスが
エキスヽヘルマン兩人を
忍ばせ玉を窃取して
土をば被ひ隱し居る
館の主人は村肝の

心を痛め給ひつゝ
命日夕に迫る折
これの館に入り來り
玉の所在を探索し
少時留まる折もあれ
ワックス司初めとし
教の道の三千彦を
此靈場に永久に
惡酔怪を組織して
其勢の凄じさ
重き病の身となりて
神の命を畏みて
鬼國姫に賴まれて
館の難儀を救ひつゝ
色と慾とに迷ひたる
其外白の惡漢が
魔法使と云ひ觸らし
住める男女を嗾かし
館を目宛に攻め來る
我は僅かに身をもつて

寄せくる曲に打ち向ひ
味方は一人敵軍は
やみ〳〵敵に捉へられ
生死不明の境涯に
斯る所へスマートが
嚴の言靈のり出し
我が生魂を呼び生けて
勇氣日頃に百倍し
取り除かんと勇み立ち
心を配り漸くに
力限りに戰へど
雲霞の如き勢に
アンブラック河に投げ込まれ
陷りたるぞ腑甲斐なき
現はれ來り懇に
清水を口に含みつゝ
再び元の身となしぬ
神の館の災を
種々雜多と身を焦し
惡漢共を捕縛して

定めの櫃に鞭を當て
笞の下に惡漢は
あゝ惟神々〳〵
危き命を助けられ
日に夜に快方に相向ひ
目出度茲に歸りまし
濟まして喜ぶ折もあれ
眞純の彦や伊太彦を
師弟の對面なし遂げぬ
神の御前に赤心を
タンク、トンクの兩人が
雲を霞と逃げ去りぬ
貴き神の御惠
館の主人の重病も
デビスの姫やケリナ姫
親子對面恙なく
玉國別の師の君が
伴ひ來り嬉しくも
あゝ惟神々〳〵
捧げて感謝し奉る

朝日は照るとも曇るとも
空おち星は失するとも
神の依さしの熱誠に
心を察し師の君が
我等と共に月の國
進ませ給へ　惟神
昨日に變り四方八方に
雨さへ交る夏の日の
片時さへも空費せず
進ませ給へと願ぎ奉る

月は盈つとも虧くるとも
千尋の海は涸るゝとも
盡さにやおかぬ三千彦が
これの館を立ち出でゝ
ハルナの都にスク〳〵と
猶豫もならぬ今日の空
霞棚曳き風荒く
行方定めぬ人の身は
神の御爲世の爲に
デビスの姫は我前に

百の言靈宣り給ひ
心せつなき談判に
躊ひ居たる時ぞかし
これ幸と逸早く
一日も早く進みなん
神の教の三千彦が
我師の君と諸共に
青野が原を打ち渡り
風に髪をば梳ずり
早く〳〵」とせき立てる

妹背の道を契らんと
我は言葉も返しかね
我師の君の出ましを
館を出でゝ月の國
眞純の彦よ伊太彦よ
生言靈を諾ひて
膝の栗毛に鞭ちて
暑熱と戰ひ雨を浴び
進み行かなんいざ早く

○

眞純の彦は立上り
恭〳〵しくも拍手して
言葉も低う腰屈め
玉國別の宣傳使
諸ひまして片時も
惡魔の征途に上りませ
如何でか怖れん神の道
浪風猛る湖や
神の惠に打ち渡り

大神前に打ち向ひ
玉國別に打ち向ひ
『我師の君と仕へたる
三千彦司の言の葉を
早く此場を立ち出でゝ
如何なる曲の攻め來とも
千里の山川打ち越ねて
濁水漲る大川を
嶮しき阪を攀登り

道々惡魔を言向けて
許させたまへと願ぎ奉る』

進み行かなん惟神

○

玉國別『テルモンの山の嵐もおさまりぬ
いざ立ち行かん月の御國へ』

三千彦『師の君の宣りのまに〳〵出でゝ行く
行手の道は安けからまし』

デビス姫『三千彦の神の司よ若草の
妻を伴ひ進ませ給へ』

三千彦『大神の宣りのまに〳〵出でゝ行く

三千彦司如何に苦しき。
師の君の許させ給ふ事あらば
伴ひ行かん月の御國へ」

デビス姫「玉國の別の命に物申す
妾を印度につれて行きませ」

玉國別「垂乳根の許しありせば連れ行かん
唯何事も神のまに〳〵」

鬼國姫「デビス姫三千彦司の妻として
連れさせ給へ神の司よ」

玉國別「垂乳根の母の許しのある上は

如何で拒まん旅の伴連れ」

眞純彦「永久の花開くなる春秋の
喜び胸に三千彦の君」

伊太彦「いたいけのデビスの姫を妻となし
旅に出でます君ぞかしこき」

三千彦「さりとても心に染まぬ道連れよ
神の使命を相果すまで」

眞純彦「言の葉の綾をかざりて若草の
妻忌みがてにのるぞ可笑しき」

求道居士「三千彦の神の司の心根は

三五の月の如くなりけり。

いざゝらば我は此家に止まりて

二人の親に厚く仕へん」

ニコラス　『玉國の別の命に物申す

これの館を如何に治めん」

玉國別　『バラモンや、三五教の隔てなく

齋たまはれ大本の神

さりながらこれの館はバラモンの

神をば捨つる譯にはゆかず。

三五の神を齋きてバラモンの

皇大神に厚く仕へよ」

ニコラス　『隔てなき君の言葉に從ひて

齋き奉らん百の神達。

バラモンの軍の君を今日よりは

離れて厚く神に仕へん」

玉國別　『いざさらば百の司よ心安く

いとまめやかに世を過ごしませ」

鬼國姫　『懷しき教の君に遇ひ乍ら

いま別れんとする胸の苦しさ」

ケリナ姫　『皇神の教の道を傳へ行く

第六章　茶袋（一四八一）

三千彦は先に立ちテルモン山の中腹を南へ〳〵と下り行く。比較的嶮峻な阪道で足許に少しも目放しが出來ぬ。金剛杖を力に指の先に全身の重味を集中し乍ら拍子をとつて下り行く。

三千彦『三五教の宣傳使
板を立てたる阪道の
誠に閉口仕る
デビスの姫よ氣をつけて
月の都に立向ふ
如何なる敵も恐れぬと
ヌルリ〳〵と辷るのは
玉國別の師の君よ
轉倒せぬ樣になされませ
神力無双の宣傳使

其首途に過つて
それこそ前途が氣にかゝる
今日は大切の出陣も
天津御空に目をやらず
眼を注ぎ氣を配り
云ふより早く足滑り
我等が前途を祝すべく
瑞の御靈の御守り
直日に見直し宜り直し
面白おかしく腔笑ふ

もしも轉倒したならば
御幣を擔ぐちやなけれども
變らぬ樣な旅の空
暫らく足の爪先に
ウントコドッコイ、ズウ〳〵
ドスンと搗いた尻餅は
空に輝く望月の
前途必ず吉祥と
足もワナ〳〵下り阪
今日の旅出の勇ましさ

朝日は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも
梢に蟬は吠るとも
汗は何程出るとても
頭の上からカン〳〵と
日の大神が照らすとも
神に任せし此體
岩より固い魂は
常磐の松の岩の上に
生茂りたる如くなり
ウントコドッコイドッコイショ
よくまア辷る坂だなア
赭土許りがピカ〳〵と
光つた上に濕りをば
帶て居るのでよく辷る
誰が通つたか知らないが
こりや又ひらい磨けやう
流石のスマートさんでさへ
四つの足を持ち乍ら
あれ、あの通りチガ〳〵と

體を斜に構へつゝ
餘程きつい阪道だ
音に名高き湖だ
この湖を渡らねば
ウントコドッコイ、ズウ〳〵〳〵　ほんに危險な辷り阪
坊主頭を瓢簞で撫でゝる樣な足具合
うつかりすると轉倒し
天狗の面やお多福の
玉の御舟を雨曝し
せなくちやならぬ恐い道
氣をつけなされ皆さんよ
ウントコドッコイドッコイショ
どうやら阪が緩うなつた
こゝで油斷をしちやならぬ

下つて行くのを眺むれば
これから先はテルモンの
我等一行宣傳使
月の御國にや行かれない

バラモン教の惡神が
要して待ちさうな處だぞ
腕に覺えのある上は
あゝ惟神〳〵々々

眞純彦は亦歌ふ。

眞純彦『テルモン山の南阪
三千彦さんが先に立ち
妻の命のデビス姫
眞純彦とも伊太公とも
ほんにお前は水臭い
我等一行の前途をば
何程敵が來るとも
決して怯まぬ大和魂
神のまに〳〵下り行く』

鰻の樣に辷る道
吾師の君と若草の
二人の名をば呼び乍ら
仰有らないのは何事だ
玉國別の師の君の

御名を呼んで親切に
實地誠の腹の中
その身の上が氣にかゝり
お名を呼んだに違ひない
現銀至極の男だな
途中に於て若者に
碎けて誠の間に合はぬ
大切の〳〵使命をば
さはさり乍ら三千彦の
案ずる事はなけれども

注意をしたのは表向き
新婚旅行のデビス姫
義理か妬くかで師の君の
アハヽハヽアハヽヽ
それだによつて宣傳の
女房を持たすと魂が
女に心引かされて
忘る事があるものだ
神の使は格別だ
第一女に氣をとられ

魂は中有に飛び散りて
目につかないか二度三度
肝腎要の先に立つ
辷つて轉けて吾々が
何か一つの原因が
省み玉へ三千彦よ
神に代りて氣をつける」

伊太彦は亦歌ふ。

伊太彦「ウントコドッコイ〳〵ショ
憑物皆駆け出すも

肝腎要の足許が
スウ〳〵と辷りよつた
道案内の三千彦が
無事に此阪下るのは
なければならぬ道理ぞや
あゝ惟神々々

惡魔は出るとも逃ぐるとも
此阪道になつたなら

どうしても體が草臥る
女房を連れた三千彦は
元氣日頃に百倍し
六方を踏んで阪道を
エンヤラ〳〵〳〵と
但は蛙の手踊か
ステヽコ躍りと云ふ樣な
アハヽヽハッハヽ　ズウ〳〵〳〵〳〵　オットドッコイ足辷り
お尻をドンと打ちました　天狗の面も茶袋も
神の御蔭で御安全　二つの玉は完全に

さはさり乍ら最愛の
嘸や樂しい事だらう
意氣揚々と肱を張り
八王神歩み其儘に
そのスタイルは蟷螂か
又も違ふたら山猿の
さても怪しきスタイルだ

お腹の中へ舞ひ上り
あゝ惟神　々々
土蟹ぢやないが横歩き
三千彦さんの御夫婦は
吾師の君よ眞純彦よ
此阪無事に下りませ
聲はミン〳〵眠たげに
そんな陽氣な事かいな
どうして之が眠られよか
酒徳利の樣になつた

大急行で洋行した
目玉のとび出るきつい阪
正面に足が運べない
轉けよと倒れよと構はぬが
何卒用心遊ばして
夏の木立に鳴く蟬の
寢言交りに歌ふて居る
此阪道は命懸け
足のこぶらがブク〳〵と
ズウ〳〵〳〵〳〵アイタヽッタ

ヤッパリ阪を下るのは　　口を噤へて俯向いて
下らにやならぬと云ふ事を　　初めて体得致しました
三千彦司が先に立ち　　下らん歌を喋る故
眞純の彦も伊太彦も　　つひ釣り出されウッカリと
退屈紛れに喋つたが　　それが吾身の仇となり
デッカイお尻を打ちました　　あゝ惟神　々々
こんな事だと知つたなら　　ワックスさんが馬場にて
笞刑を受けた時の樣に　　銅盥を尻につけ
下つて來れば宜かつたに　　下司の知識は後からと
人が云ふのも無理は無い　　あゝ惟神　々々

これ〳〵デビスのお姫さん　　お前も一つ附合ひに
此阪道を下りつゝ　　下阪の歌を歌ひませ
三千彦さんの機嫌のみ　　とらず吾々一行の
チッとは心を慰めて　　平和の女神の本領を
發揮し玉へ惟神　　神の使の宣傳使
伊太彦さんが賴みます　　あゝ惟神　々々
御靈幸はひましませよ」
デビス姫「妾は三千彦宣傳使　　夫に持つたデビス姫
神のお道に仕ふ身は　　夫婦ありては肝腎の
御用が出來ぬと聞きました　　兎は云ふもゝの玉の緒の

命を助け下さつた
惡魔の猛り狂ふなる
雲霞の如き敵軍の
その雄々しさを思ひ出し
どうして舘に居られませう
力を盡し身を庇ひ
命を的に我夫の
女の道を盡さねば
住み心地よき我舘
踏みも習はぬ旅枕
大恩深き神司
荒野ケ原を打渉り
中に向つて進み行く
女乍らもジッとして
婦は夫に從ひて
マサカの時が出て來たら
使命を全く遂げさせて
濟まぬ事だと覺悟して
後に眺めて遙々と
苦勞を覺悟で行きまする

陽氣浮氣で斯んな事
出來そな事がありませうか
妾の心は眞劍だ
一旦夫に魂も
決して中途に怯まない
貴方に劣らぬ功績を
玉國別の師の君よ
伊太彦司も諸共に
眞面目に覺らせ玉へかし
菊石の出來た宣傳使
どうして纖弱き女の身
揶揄ひなさるも程がある
人が笑ふが譏らうが
體も共に任したら
女乍らも天晴と
立て、御目にかけまする
眞純の彦の神司
妾の心の清きをば
決して色や戀のため
三千彦さんに惚れませう

何程顏は醜ても　肝腎要の魂は
三五の月の姿より　百倍增して美しく
心の鏡に映りしゆ　神の御爲世の爲に
かゝる健氣な武士と　一度腕に撚かけて
世界の爲に盡さんと　思ふばかりの眞心が
凝り固まりし今日の旅　笑はせ玉ふ事もなく
纖弱き女の身なれども　許させ玉へ何處迄も
吾等夫婦を從へて　進ませ玉へ惟神
神の御前に誠心を　誓ひて告白仕る
あゝ惟神々々　御靈幸はひましませよ」

と歌ひ了り流石の阪道も賑々しく笑ひ興じ乍ら、揶揄ひ半分に下り行く。漸くにして下り三里の急阪を越ねテルモン湖の邊に着いた。阪道で絞つた汗は湖面を吹く涼風に吹き拂はれ、得も云はれぬ爽快の氣分に漂ふた。東西百里南北二百里の大湖水は金銀色の魚鱗の波を湛へ、洋々として靜かに横たはつて居る。

（大正一二、三、二八、舊二、一二、於皆生温泉濱屋、北村除光錄）

天地の神の手すさびになり出でし
百の瑞岩見る目涼しき

第七章　神

舩（一四八二）

玉國別の一行はテルモン湖の邊に着いた。萬波洋々たる紫の水面を或は高く或は低く、アンボイナが翼を逆八の字に擴げて「大鳥は羽を急がぬ」と云ふやうな、應揚ぶりを見せ滑走して居る。信天翁、鵜の群は東西南北に或は百羽、或は二百羽密集して羽を忙しさうに一直線に飛んで居る。水面は凪だとは云へ、名に負ふ大湖水、幽かに吹く北風に煽られて七五三の浪が磯邊に皷をうつて居る。遠く目を放てば、白砂青松の濱、左の方や右の方に輪廓正しく線を揃へて斷りたてたやうに並んで居る壯絶快絶、心膽を洗ふが如く、一つ島の諏訪の湖もかくやと思ふ許りであつた。玉國別は萬波洋々たる湖面を眺めて、

玉國別『打ちよする波の皷の音も清く
　響き渡れり玉國別の耳に。
　湖面を右や左に飛びかひつ
　　魚を漁るか鵜の鳥幾群』

三千彦『湖の岸邊に匂ふ燕子花
　打つ白浪に擬ふべらなり』

眞純彦『大空も湖の面も澄み渡る
　　潮三千彦の合せ鏡か』

伊太彦『見渡せば雲か霞か白浪の
　　彼方に見ゆる珍の松原』

デビス姫『水の面に浮びて遊ぶ鴛鴦の
　姿眺めて心躍く』

眞純彦『千代迄と契る言葉も口籠る
　鴛鴦の番の若夫婦かな』

玉國別『齋苑館立ち出でしより山野原
　のみ渉りたる目には珍らし。
この湖の廣く深くて清らけき
　姿は瑞の御靈なるらん。
素盞嗚の神の尊に今一度
　これの景色をお目にかけたし。

村肝の心のまゝになるならば
　この湖を家苞にせん。
皇神の惠は深し八千尋の
　底ひも知れぬこれの湖』

デビス姫『如何にして此湖水を渡らんか
　頼る船なき今日の旅立』

眞純彦『唯一人玉の御船を抱わつゝ
　現れます女神のデビス姫あはれ』

デビス姫『此船は世人を乗する船ならず
　我春の君の專有物ぞや。

湖の邊を漁り烏貝
拾ひて船にかへんとぞ思ふ」

三千彦「アンボイナ翼に乘りて易々と
神のまに〳〵過り行かなん」

伊太彦「いつ迄か心を苦しめ惱むとも
渡る術なし遠き浪路を」

かく一行五人は湖畔に立つて下らぬ歌を詠み乍ら、如何にしてこの湖水を渡らんかと稍當惑の體であつた。かゝる處へ一艘の漁船、矢を射る如く走り來る。一行は救ひの船の到來と、望みを抱いて船の此方に到着するを待つて居た。船頭は、拍子の抜けた聲で、

船頭「オイ、お前達は三五教の宣傳使と見るが、此湖を渡る積りか。ハルナの都の大黒主の神樣から、我々は澤山のお手當を頂いて……三五教の宣傳使が此處へ來たならば決して渡してはならない……と嚴しき命令を受けて居るのだ。渡し度うても渡してやる事は出來ない。ぢやと云ふて一枚の紙にも裏表があるものだ。海には船、水には空氣、男には女だ、鑿には槌、硯には墨と昔からちやんと定つて居る。お前の出やうによつては渡してやらん事もない事もない。どうする積りだ。いつ迄も溺死よけの石地藏さんのやうに湖水を眺めて永久に立つて居る積か。返答が無ければこの船を又彼方に持つて行くから、何とか考へたがよからうぞ」

伊太彦「オイ船頭、そんな事云つても要領が分らんぢやないか。表向渡す事は出來ないが、澤山の金を呉れたら、渡さうと云ふのだらう、そんなら分つて居る。幾何でも

やるから向岸迄早く渡して吳れ」

船頭「何と云つてもこの湖水は南北二百里もあるのだから、ちよつくら一寸渡る譯には行かん。お前達を乘せた以上は、飯も食はしてやらねばならず、何程急いでも十日はかゝるのだから、餘程澤山貰はなければ引き合はないのだ。後の喧嘩を前にして置かなくつては、向ふへ着いてから、高いの安いのと云はれては詮らんからのう」

玉國別「幾何でもやるから、早く船を出して吳れ」

船頭「そんなら百兩吳れますか、五人さんと犬一匹だから平均二十兩にもなりません。安いものでせう」

玉國「一兩出せばお米が一石あるぢやないか、百兩とはちと高いぢやないか」

船頭「高けりや止めとこかい、左樣なら」

と早くも櫓を漕いで立ち去る勢を見せる。デビス姫は逃げられては大變と氣を焦ちデビス「船頭さん、望み通り百兩上げます。何卒早く向へ渡して下さい」

船頭「ヤ有難い、お前は神館のお姫さんだな。こんな好い男と、どこかへ駈落をするのだらう。百兩は安いものだ。もう百兩出しなさい。さうすれば、お前さんがこの湖を渡つて駈落をしたと云ふ事を隱して上げる。口止料として百兩は安いものだらう」

デビス「エ、仕方がムいません、望み通り上げるから早く乘せて下さい」

船頭はニコ〳〵し乍ら船を横付にした。五人はスマートと共に早くも飛びのつた。折しもそよ〳〵と吹く北風に白帆をあげ、少時湖面をスル〳〵と辷つて行く。船頭は艫に立ち櫓を手に握りながら、風に破つた太い喉から、透通るやうな聲を出して欸乃を唄ひ出した。

『此處はアーエー
天竺のーテルモン湖水
渡るもー嬉しいーやあ、　夫婦連れエー
月のオーエー
國にはア、名所がアームるウー
ハルナーアのーエー
都のオーー、　蓮の池
浪はアー、うつうつー、　皷のオー音か、
但し龍宮のオー、　乙姫かアー』
と唄ひ乍ら、追々岸を離れて、南へ南へと一直線に進んで行く。次第々々に乗り場の

老松は姿小さくなり、テルモン山の頂きは却て高く見られて來た。此時船の底より現はれ出でた四人の荒男、體一面網襦袢や網ズボンを着し、大刀を提げて五人の前に進み來り、嫌らしき笑を浮べ睨めつけて居る。これはワックス、エキス、ヘルマン、エルの四人がこの湖上にて恨を晴らさんと、故意とに船頭に澤山の金を與へ湖水の中央にて五人の男女を斬り殺さんと企んだ仕事である。

ワックス『ヤア珍らしや三千彦、其外三五教の魔法使、並に我々に耻を掻かしたデビス姫の阿魔つ女。よくまア我々の計略に釣られよつたな。最早此處迄釣り出した以上は、如何に神變不思議の魔法を使ふとも逃るゝ事は出來まい。サア是から我々四人が汝等を青龍刀の錆となし呉れん。「又この犬畜生も湖の上では如何ともする事が出來まい。何れも觀念を致したがよからう。此船底には數十人の荒男が隠してあ

れば、ヂタバタ致してももう駄目だ。デビス姫を潔く此方に渡して、其方はこの湖水に身を投げて往生致すか。左もなければ氣の毒ながら我々が刀の錆にして呉れる。てち、さても鈍馬野郎だなア」

玉國別は平然として些も騒がず、天の數歌を奏上し始めた。如何はしけん、俄に暴風吹き來り、山岳のやうな浪猛り狂ひ、船は木の葉を散らすが如く、前後左右に動搖し初めた。道のワックス以下の惡人も身の置所なき船の動搖につれて右にコロ〳〵、左にコロ〳〵、きねぐそを棟にまぶしたやうにごろつき初めた。道の玉國別も餘り激しき船の勁搖に眼眩みむかづきさうになつて來た。敵味方の區別なく一生懸命に叶はぬ時の神頼み、口の奥にて祈つて居る。船頭は船の動搖した機に櫓のつかに撥られ、もんどり打つて荒狂ふ荒浪の中にドンブと許り投げつけられ、石の地藏を投り込んだやうに、ブル〳〵とも何とも云はずに湖底深く沈んで仕舞つた。斯る所へ一艘の船、七八人の若者一生懸命に櫂を漕ぎながら、此方を目蒐けて馳來る。見れば三五教の宣傳使初稚姫が、斯くあらん事を豫期し、島陰に隠れて待つて居たのである。初稚姫は舷頭に立ち現はれ、

初稚「玉國別さん、御一同さん、サア早く此船にお乘り下さい、此船なれば如何なる荒浪も大丈夫です」

一同は、救ひの船と拍手感謝し乍ら手早く乘り移つた。八人の水夫は荒浪を乘り切り、驀地にすう〳〵と進み行く。スマートはざんぶと許り飛び込んだ。初稚姫も亦ざんぶと許り飛び込み、スマートに跨り湖面を泳ぎ出した。忽ち荒波は鎮まり、油を流したる如き鏡の湖と化して仕舞つた。初稚姫は矢を射る如くスマートに跨り、見

る〳〵其姿は一行の視線を離れて仕舞つた。ワックスの乗つて居た大船は肝腎の船頭を失ひ、櫓を操る事を知らず、櫂がみをなしながら水面にキリ〳〵舞をやつて居る。三千彦、伊太彦は舷を叩き愉快げに歌ひ乍ら舳を南に向け微風に帆を孕ませ走り行く。

三千彦『此處は名に負ふテルモン港　東西百里南北は
二百里ありと聞き及ぶ　神の使の宣傳使
テルモン舘を後にして　足許辷る阪道を
漸う下り來て見れば　金波銀波の漂へる
大海原の右左　バインの林は立ち並び
金砂銀砂は日光に　輝きわたる麗しさ
靜かな浪は舷に　押し寄せ來り皷打つ
あゝ天國か樂園か　譬がたなき風景ぞ
待つ間程なく一艘の　老朽船が現はれて
我等一行を乘せながら　南へ〳〵と進む折
忽ちワックス船底より　現はれ來り大刀を
引き扳き我等一行を　力限りに脅迫し
暴逆無道の手を下し、　戀の恨を晴らさんと
湖の如き卷舌を　並べてゴロつく折もあれ
俄に吹き來る湖嵐　前後左右に吹きまくり
小山のやうな浪を立て　瞬く中に船体は

風に木の葉の散る如く
櫓を操りし船頭は
湖の藻屑となり果てぬ
其他三人の惡漢も
右や左にヨロ〳〵と
我師の君を初とし
搖られて苦しむ時ちあれ
現はれ來る一艘の
進み來るぞ不思議なれ
こは何人の船なるぞ

危さ刻々增來り
撥ね飛ばされて無慙にも
道無道のワックスや
激しき颶風に敵しかね
轉び廻りしおかしさよ
我等一行も船體を
左手に浮ぶ島の陰
船は此方に龍の如く
我等は愁眉を開きつゝ
瞳を据ゑてよく見れば

豈許らんや三五の
初稚姫の御姿
目無堅間の御船をば
聞くより嬉しさ限りなく
ヒラリと船に飛び乘れば
神の司のスマートは
身を躍らして飛び込みぬ
初稚姫は忽ちに
スマートの背に跨りて
あゝ惟神〻〻

教の道に名も高き
我等が危難を救はんと
用意遊ばし玉ひしと
感謝の涙止めあへず
今迄我等を助けたる
ザンブと許り浪の上
あはやと思ふ暇もなく
其身を湖面に投げながら
矢を射る如く出でたまふ
神の變化か神人か

唯しは誠の三五の
合點の行かぬ御救ひ
後振り返り眺むれば
肝腎要の船頭を
機關を失ひ浪の上
進みなやむぞ可笑しけれ
月は盈つとも虧くるとも
如何なる嵐が吹くとても
神に任せし我々は
天より下し玉ふなり

初稚姫のお姿か
嬉しく感謝し奉る
今迄乘り來しほろ船は
浪に呑まれて操縦の
クル〳〵と回轉し
旭は照るとも曇るとも
假令大地は沈むとも
誠一つの三五の
まさかの時の救け舟
あゝ尊しや有難や

神は汝と共にあり
恐るゝためしは要らないと
教を今更目の當り
千尋の深き御恵
救誓の船に帆を上げて
夏の夾と云ひ乍ら
あゝ惟神々々

人は神の子神の宮
諭し給ひし三五の
知るぞ嬉しき湖の上
必ず忘れまつらんや
涼しき風に吹かれつゝ
ハルナの都に進み行く
御靈幸倍ましませよ」

と歌ひ乍ら意氣揚々として際限もなき湖水を進み行く。あゝ惟神　靈幸倍坐世。

（大正一二、三、二八、舊二、一二、於皆生温泉濱屋、加藤明子筆）

第八章　孤

テルモン湖水の眞中に
全島巖に包まれて
彼方此方に點々と
周回一里磯邊に
さも凄慘の氣に充ちぬ
自ら命終るまで
流し捨つべき地獄なり
憐れな人は磯邊の

島（一四八三）

波に漂ふ一つ島
少しばかりの笹草が
僅かに生ゐしツミの島
いつも荒波嚙みつきて
そも此島は罪人を
食物さへも與へずに
此鬼島に現はれし
逆捲く波に飛び込みて

貝をば拾ひ蟹を採り
骨と皮とになり果てゝ
折から來るバラモンの
傍の沖を通る折
無慙や船を暗礁に
木葉微塵に船体を
五人の男はツミの島
二人は水に呑まれつゝ
後に殘りし三人は
バラモン教で名も高き

僅かに露命をつなぎつゝ
恰も餓鬼の如くなり
四五の勇士は船を漕ぎ
忽ち吹き來る荒風に
突き當て忽ちバリ〳〵と
打挫きたる悲しさに
目當に漸く泳ぎ着き
どこともなしに隱れける
ハールヽヤッコスヽサボールの
荒くれ男のヤンチャ者

漸くこゝに來て見れば
此ツミ島に捨てられし
巖の穴に身を潜め
髯蓬々と猿の如
縺れからみし穴棲居
漂ひ來りし三人は
探らんものと磯邊を
寄せては返す荒波の
空しき腹を抱へつゝ
尋ね逍遙ひ漸くに
殺人罪の廉により
ダルヒメートの兩人が
衣も着けず眞裸
髪は鳶の巣の樣に
かゝる所へ船を割り
先づ第一に食糧を
彼方此方と探せども
危き狀に辟易し
島の遠近ウロ〳〵と
此岩窟を見付け出し

二人の男の姿をば
此罪人を打殺し
顏見合して嫌らしく
見るより早く三人は
當座の餌にせんものと
笑を洩らすぞ恐ろしき。

三人の男は漸く此島に命から〴〵辿り着いた。往來の船も少く、いつ迄待つても大陸へ歸る見込がない。山一面岩だらけで草の根を掘つて喰ふ事もならず、磯邊の貝や蟹を漁らんとすれども、こゝは殊更湖中の波荒き所、到底一匹の蟹も一芥の貝も手に入れる事が出來ぬ。三人は餓死する外なき破目に陷つた。何か獲物もがなと、彼方此方と小さき島を隈なく探し廻り、漸く此岩窟の中に二人の罪人が痩こけて忍んで居るのに氣がついた。三人は空腹に堪へ兼ね此二人の男を當座の餌にせんものと恐ろしき心を起し、二人の前にツカ〳〵と立寄り、矢庭に一人を引掴み、双方より兩の腕を以

てメリ〳〵と力限りにむしり取らうとした。一人の男は岩窟に隠しあつた鋭利な石刀を揮つて一人の友を救はんと立向ふた。三人は此權幕に恐れてパッと手を放した途端に、さしもに險峻な岩山を兎の如く逃げ登り、頭上より岩石の片を拾つては三人目蒐けて投げつける。三人は止むを得ず、此危險を免れんために二人の潜んで居た岩窟の中へ身を隠した。二人の男は、最早三人の人喰ひ人種が吾が投げ下す數多の岩石に打たれて一人も殘らず倒れたるならん、久振りにて人肉の嗜き奴を鱈腹喰つて元氣をつけんものと色々廻り道して、稍緩き山腹を下り磯邊を傳ふて吾住ひたる岩窟の側へ寄つて來た。見れば三人は少しの怪我もなく穴の中に鼎坐となつて胡坐をかき、何事か話して居る。二人はこれを見るより『やア、まだピチ〳〵して居る。こりや大變だ』と磯端を傳ひ、一生懸命に逃げ出す。その足音にハッと氣がつき三人は『さア、今の間に取摑まへて口腹を充たさんもの』と一生懸命に二人の後を追ふた。二人は小石を拾ひ投げつけ乍ら逃げて行く。三人は『己れ逃がしてなるものか、山へ上げては大變』と一生懸命に追ふて行く。メート、ダルの兩人は磯端の蕭を立てた樣な岩の前に追ひ捲られ、進退維谷まり、死物狂となつて三人に向ひ組みついた。こゝに三人の空腹者と、痩た乍ら蟹や貝に腹を拵へ、饑餓に慣れて居る二人の男と組んず組まれつ、磯端に餓鬼同士の大活劇を演じて居る。

玉國別の乘れる船は四五丁許り沖の方を白帆に風を孕ませ乍ら走つて居る。舳に立つて居た伊太彦は不思議な島が湖中に浮かんで居ると、よく〳〵見れば磯端に四五人の男が明瞭り分らねど、何か格闘をやつてる樣に見ゐる。直ちに苫茸の中に潜り込み、伊太『もし先生、彼處に不思議な島が浮んで居ます。そして人間の影らしい者が磯端で

大喧嘩をして居る樣ですが一寸御覽なさいませ」

玉國「うん、大方有名なツミの島の側へ近寄つて來たのだらう、彼處には大罪人が押込めてあると云ふ事だ。可憐さうなものだな」

伊太「どうでせう、一つ船を寄せて罪人ならば尙の事、大神樣の敎を說き諭し、助けてやらうじやありませぬか。現在人の難儀を見て通り越すと云ふ事は吾々宣傳使の勤めではムいますまいがな」

玉國「うん、さうだ。助けてやりたいものだ。おい船頭、どうか彼の島へ船を着けて呉れまいか」

船頭の一人「はい、仰せとあれば近く迄は船を寄せて見ませうが、彼處には大變な惡人ばかりで、うつかり船でも寄せやうものなら喰はれて了ひますよ。先繰り〳〵送られて行く奴が食物がない爲、弱ひ奴から喰はれて了ひ、後に殘つて居る奴は手にも足にも合はぬ人鬼ばかりだと云ふ事です。上陸さへなさらねば近く迄船を寄せて見ませう」

伊太彥は又もや舷頭に立ち現はれ、

伊太「おい、船頭大變な活劇が演ぜられて居る樣だ。一つ見物して行かうぢやないか」

船頭「そんなら近くまで寄せて見ませう。隨分恐ろしい處ですよ」

と云ひ乍ら八挺櫓を漕いで矢を射る如く島の近邊まで船を寄せた。島の近く四五十間の間は、どうしたものか非常に波高く且つ暗礁點綴して實に危險極まる場所である。船頭は巧に暗礁をくゞり、漸くにして十間ばかり磯端の手前に近づいた。五人の男は何れもへタ〳〵になつて息も絕ゑ〳〵に倒れて居る。

玉國「やア、船頭、御苦勞だがソッと船を着けて吳れ。どうやら五人の男が互に爭ふた結果、息も絶々〳〵になつてる樣だ。何とかして助けてやらねばならぬ」

船頭「もし、お客樣、あの樣な者を助けやうものなら大變、此方が罪人になり、此島へ數多の兵士に送られて永遠に捨てられねばなりませぬ。それはお止しになつたが宜しうムいませう」

玉國「何、構ふものか。人の難儀を見て吾々は見逃す譯には行かぬ。さア早く船を着けて吳れ。萬一お前が船を着けた爲、罪人になる樣な事があつたら、私が辯解してやらう。そして屹度助けるから安心して磯端に寄せて吳れ」

船頭の一人「そんなら仰せに從ひ、兎も角船を着けて見ませう」

と稍灣形になつた波の低き岩蔭に船を寄せた。こゝに船頭は船を固く磯端の岩に纏りつけ、波に攫はれて漂流する憂ひなき樣、幾筋も綱を曳いて繫ぎつけた。

玉國別一行は磯端を傳ひ乍ら、五人が倒れて居る側に荒石を跳び越し〳〵進み寄つた。五人は宣傳使の姿を眺めて怪訝な顏して居る。

伊太彥は先づ五人の側に寄り、

伊太「お前達五人は斯んな離れ島に何をして居るのだ。見れば各自に顏から血を出して居るじやないか。斯樣な島へ罪あつて流された上は、互に仲良く暮したら如何だ」

バラモン軍のヤッコスはムク〳〵と起き上り、顏の血糊を手にて拭ひ乍ら、

ヤッコス「私はハルナの都の大黑主樣から或使命を帶びて此湖水を渡り、北に向つて進む折しも暴風に遭ひ暗礁に衝突し船体は木葉微塵となり、二人の同僚は逆卷く波に呑まれ行衛不明となり、吾々三人此島に漸く漂着致しました。別に怪しいもので

はムいませぬから、何卒お助けを願ひます」

メート『貴方は神様のお使と見ますが、何卒私等二人をお助け下さいませ。此三人が二時ばかり以前に此處へ漂着し、我々二人の命をとり、餌食にせんと追ひ駈けますので、逃げ場を失ひ死物狂となつて防ぎ戦ふて居ましたが、最早力盡き手も足も云ふ事を聞かなくなりました。何卒憐れに思ひ命をお助け願ひます。そして三人は何處かへ連れてお歸り下さいませ。斯様な人喰人種が此島へ居りましては吾々は堪りませぬから』

と嫌らしい飛び出した目から涙をハラ〳〵と流し水鼻汁を垂らして悲しげに頼み入る

玉國別は船中に貯へあるパンを取り出し、言葉優しく五人に取らせ、且つ種々と一同が心を籠めて介抱した。五人はパンを與へられ、又久振りでダル、メートは眞水を與へられ、嬉し泣きに泣き乍ら、一生懸命に掌を合せて拜み倒して居る。

三千彦、デビス姫は言葉優く五人を勞り、足の弱つたものは手を曳き、或は肩にかけ等して乘り來りし船の側近く誘ひ來り、各自五人の体を舁く樣にして船の中へ救ひ入れ、横に寢させ又もや帆を上て南へ〳〵と進み行く。

眞純彦は舷頭に立ち歌を歌ふ。三千彦、伊太彦は舷を叩いて潔く拍子を取る。

眞純彦『テルモン湖水の眞中に　波を浴びつゝ衝つ立てる
名も恐ろしきツミの島　人喰人種か知らねども
五人の姿を見るよりも　いとゞ憐れを催して
見捨て兼ねたる吾一行　危き暗礁潛りぬけ
漸く船を磯端に　繋ぎてこゝに上陸し

五人の男を相救ひ
折から吹き來る順風に
船辷らして進み行く
事の次第は知らねども
ムザ〳〵殺すものならず
罪人なりと憎しみて
情なく捨てゝ自滅をば
呆れ果てたる制度なり
如何なる罪も宜り直し
改めしめて天國の
目無堅間の船に乘せ
帆を孕ませて波の上
如何なる罪を犯せしか
人は天地の分靈
バラモン國の掟とし
鳥も通はぬ此島に
待たすと云ふは何の事
神が表に現はれて
惡き心や行ひを
神苑に救ふ三五の
神の教の宣傳使
二人の男の子は三五の
身を安全に何處迄も
さはさり乍ら兩人よ
心の底より改めて
一時も早く悔悟して
神は汝と倶にあり
世に恐るべきものはなし
神の惠みを朝夕に
束の間も忘れなよ
心安かれメート、ダル
神の司が預りて
心を寵めて守るべし
今日を境に村肝の
惡と虚僞との行ひを
誠の道に適へかし
神に任せし人の身は
あゝ惟神々々
心に深く刻み込み
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも
荒波猛り狂ふとも
假令神船は覆るとも
仁慈の神の在す限り
恐るゝ事はあらざらめ
勇めよ勇め皆勇め
バラモン軍に仕へたる
ヤッコス、ハール、サボールよ
汝も今より心をば
よく改めて三五の
誠の教を聞くがよい
汝等三人月の國
大黒主の命を受け
これの湖水を渡りしは
三五教の神軍を
途中に喰ひとめ進路をば
妨げせんとの企みぞと
吾等は早くも覺りけり
さはさり乍ら世の中に
敵もなければ仇もない
天地の間に人となり
同じ月日の光をば
浴びて此世にある限り
互に助け睦び合ひ
誠一つを楯として
互に手を曳き現世を
樂しく嬉しく面白く
渡るが人の務めぞや
必ず惡に迷ふなよ
三五教の宣傳使
神の司の眞純彦が
荒波猛る湖の上
神に代りて說き諭す
あゝ惟神　々々
御靈幸はひましませよ」

と歌ひ乍ら船底にコト〳〵と皷を拍たせ乍ら際限なき湖上を辷り行く。

（大正一二、三、二八、舊二、一二、於皆生溫泉濱屋、北村隆光錄）

第九章　湖

月（一四八四）

浪より出でゝ浪に入る
初稚姫の賜りし
果しも知らぬ湖原を
欺乃高く潔く
星の光はキラ〳〵と
天津御空も船底も
其中間を渡り行く
清く流れて果もなく

玉兎の玉國別司
目無堅間の船に乗り
五人の男を救ひつゝ
歌ひて進む浪の上
深く沈める湖の底
金砂銀砂を鏤めし
天の河原は南北に
洗ふたやうな月影は

湖底深くきら〳〵と
あゝ惟神　々々
浪音清き音彦の
星は御空に三千彦の
伊太彦一枚隔てたる
デビスの姫と諸共に
歌ひ歌ひて進み行く
エデンの河に船を漕ぎ
心涼しく勇ましく
汗拭き拂ふ夏の風

銀龍の如く搖らぎ居る
神の依さしの宣傳使
玉國別を初めとし
姿を寫す眞純空
千尋の深き水地獄
聲爽かに宣傳歌
天の川原に掉さして
天恩郷に上るごと
思はず知らず進み行く
いやな潮の香なく

矢を射る如く帆を孕み
折から起る荒浪を
長らく陸路の旅を經し
何とはなしに氣も勇み
沖の鷗やアンボイナ
天國淨土に昇るごと
危き命を救はれし
漸く元氣恢復し
面白さうに歌ひ出す

メート　『私の生れは月の國

テルモン　山の南麓に

マストは弓に曲りつゝ
乘り切り乘り切る勇ましさ
玉國別の一行は
身も冴ゆ〳〵と元氣よく
飛び交ふ景色を賞ながら
風に任して馳て行く
ダルとメートの兩人は
皺枯れ聲を張り上げて

首陀と生れしメーテルの
三五教の宣傳使
いと懇にことわけて
掟をやぶると知り乍ら
キヨの港にはる〳〵と
バラモン教の目付役
有無を云はせず引捉へ
三千五百の笞をあて
湖中に浮ぶツミの島
逃げ行く後を打ち眺め

私は一人の息子です
これの湖水を渡らんと
宜らせたまひし時もあれ
ダルと二人が船を出し
安着したる時もあれ
カンナ、ヘールの兩人が
キヨの關所につれ行きて
揚句の果は船に乗せ
送り屆けて逸早く
悲歎の涙に暮れにける

家に殘せし父母は
夢になりともこの樣を
翼なき身は如何にせん
ダルと二人が抱き合ひ
磯に打ち來る浪の音
磯邊の蟹や貝を獲り
救ひの船の一日も
神に祈りをかくる折
我等の姿を見るよりも
餌食になさんと怖ろしき
如何に過させ給ふらん
知らさんものと思へども
音づるよしも泣逆吃
世を果敢なみて怖ろしき
賴りに月日を送りつゝ
僅に露命をつなぎつゝ
早く來れと天地の
漂ひ來る三人連れ
叩き殺して三人が
其言の葉を聞くよりも

狹き岩窟を立ち出でゝ
さしも嶮しき岩山を
手ごろの石を手に取つて
我身の危難を逃れんと
最早三人の食人鬼
打たれて脆くも身失せしと
豈計らんや三人は
白い眼を剝きながら
見つけて又もや殺さんと
我等二人は大切の
敵の毒手を逃れつゝ
猿の如く駈け登り
人喰ひ人種を打ち殺し
心を千々に碎きつゝ
我なけ下す岩片に
思ひて窺ひ立よれば
岩窟の中に端坐して
我等二人の姿をば
力限りに追ひ來る
命を取られちやならないと

息絶ゑ〳〵に逃げ出し　ピッタリと止まつた簡の岩
進退茲に谷まりて　窮鼠却て猫を食む
命を的に逆襲と　駒立て直す苦しさよ
茲に五人は全身の　力を籠めて揉み合ひつ
疲れて互に打ち倒れ　前後不覺になりにけり
時しもあれや三五の　救ひの道を述べ傳ふ
仁慈無限の宣傳使　現はれまして我々が
危難を救ひ給ひつゝ　味よきパンを與へまし
安全無事の此船に　助けていとゞ親切に
我等が住所に送らんと　宜らせ給ひし有難さ

それに引き換バラモンは　ヤッコス、ハール、サボールの
情を知らぬ人畜生　取り喰はんと角を立て
迫り來るぞ怖ろしき　さはさりながら我々は
尊き神の御使に　守られ茲にある上は
最早怖るゝ事はなし　バラモン軍の三人よ
汝も心を改めて　誠の心に立ち歸り
惡逆無道の精神を　仁慈無限の神樣に
ならひて拂ひ清むべし　人は神の子神の宮
我は元よりバラモンの　教の道の御子なれど
三五教の宣傳使　我家に一夜泊らせて

誠の道を傳へてゆ　　茲に心を改めて
御船を出し湖原を　　遠く送りてキヨ港
思はぬ人に見つけられ　　身の災となり果てゝ
人喰鬼の任むと云ふ　　浪風荒き浮島に
流され居たるぞ悲しけれ　　仁慈無限の大神は
珍の種を道はして　　愈〳〵我等を救ひまし
湖路を守り給ひつゝ　　送らせ給ふ有難さ
假令大地は變るとも　　バラモン教の御教は
孫子に傳へて守らない　　玉國別の宣傳使
其外百の司達　　我等を憐み給へかし

皇大神の御前に　　赤心捧げ兩人が
謹み敬い願ぎまつる」

バラモン軍の捕手、ヤッコスは舷に立つてそろ〳〵歌ひ出した。

ヤッコス　「バラモン軍に仕へたる　　我はヤッコス目付役
四人の部下を引き連れて　　テルモン湖上を打ち渡り
ニコラス大尉の後を追ひ　　三五教の宣傳使
若も湖水を渡りなば　　引捉まへて懲せよと
大黒主の命を受け　　船に眞帆をば孕ませて
北へ〳〵と進む折　　俄の颶風に出會し
船は暗礁に乗り上げて　　船体忽ち粉微塵

衣類を脱ぎすて辛うじて
命辛々泳つき
彷徨ひ廻れど浪荒く
三人は磯邊をぶら〳〵と
岩蔭さして立よれば
人喰人種にありねども
心を鬼に持ち直し
一時の飢を凌がんと
企みたるこそうたてけれ
仁義道徳一通り
荒浪猛る罪の島
食を求めて遠近と
一つの餌食も無かりしゆ
足もとぼ〳〵歩みつゝ
骨と皮との二人連れ
飢たる時には是非もなし
二人の男を打ち殺し
心にもなき惡逆を
生れついての鬼でない
習ひ覺へた人の子よ

さはさりながらやむを得ず
窮すれや亂すと云ふ譬
企みたるこそ是非もなき
世界に倣ふて果敢なくも
忘れたるこそ苦しけれ
心も清き玉國の
敵と狙ふ我々を
天が下には敵なしと
今目の當り悟りけり
慘逆無道の行動を
小人下司の常として
心ならずも惡業を
優勝劣敗弱肉强食の
皇大神の御教を
三五教の宣傳使
別の命が現はれて
救はせ給ひし有難さ
教へられたる言の葉は
我等も是より慎みて
改め神の御爲に

誠を盡し世の人を
其天分を盡すべし
我等が心を憐みて
使はせ給へ惟神
朝日は照るとも曇るとも
假令命は捨つるとも
司の君の高恩は
此世を造りし神直日
總ての罪を悉く
尊き神の御心

救ひて人と生れたる
三五教の神司
尊き君の御伴に
神に誓ひて願ぎまつる
月落ち星は失するとも
深き惠を蒙りし
子孫に傳へて忘るまじ
心も廣き大直日
宣り直します三五の
深くも感謝し奉る

あゝ惟神々々
ハールは又歌ふ、
ハール「一切萬事の經緯は
概略茲に述べました
信者の端に加はりて
其日を送り居たりしが
二世と契つた女房に
彼方此方に彷徨ひつ
もう此上は盜人の
浮世を太く暮さんと

御靈幸倍ましませよ」
目付頭のヤッコスが
私も元はウラル教
神の教を崇めつゝ
何分酒に身を崩し
夜脫けせられて是非もなく
心は日に夜に癖み行く
群に加はり長からぬ
心を鬼に持ち直し

思案に暮るゝ折もあれ
情の言葉に絆されて
一年前から忠實に
此湖原を越ゑ來る
一人も殘さず引捉へ
思ひ居たるぞ果敢なけれ
三五教の信者をも
罪を重ねし事なきは
三五教の神司
やうな身分でムいます

バラモン教のヤッコスが
茲に目付の役となり
目付の役を勤めつゝ
三五教の司をば
我身の出世と誇らんと
まだ幸に一人の
神の司も捉まへず
せめては私の胸やすめ
私は唯今述べました
如何なる罪がありとても
赦させ給へどこ迄も
神かけ念じ奉る
御靈幸倍ましませよ」

廣き心に宜り直し
御伴に使ひ給へかし
あゝ惟神々々

述懷の歌を歌ふ。かゝる所へ七八艘の海賊船、船の行先に横梯陣を張り、前途を要塞し、手具脛引いて待ち居るものゝ如くであつた。あゝ玉國別の一行は如何なる運命に遭遇するであらうか。

（大正一二、三、二八、舊二、一二、於皆生温泉濱屋　加藤明子録）

瑞　月

空蟬(うつせみ)の命はともあれ愛信の
誠に生きて世をや守らむ
永久の榮ゑに充てる天國へ
昇らま欲しと祈る今日かな
地の上の使命は未だ盡きざれど
天にも諸の神業遺れる

第三篇　千波萬波

第一〇章　報

恩（一四八五）

玉國別一行の搭乘した船は假に初稚丸と命名された。その理由は初稚姫に危急の場合この堅牢なる船を與へられたからである。月照る湖面を白帆をかゝげ南へ〳〵と急速力にて翔つて行く　前方に當り七八艘の船が單梯陣を張つて初稚丸目蒐けて押し寄せ來る形勢が見えて居た。ヤッコスは之を見るより早く、

ヤッコス『もし、御一同樣、あの前方に並んでゐます七八艘の船は此湖に陰顯出沒して南北往來の船を掠める賊船でムいます。捉まつては一大事ですから何とか工夫をせなくてはなりますまい。私はこれから舳を少しく西南に向けやうと思ひますから其覺悟で居て下さい。西南へ向ひますれば暗礁點綴して容易に賊船は追つ駈ける事は出

來ませぬ。然し私も表面バラモン軍に仕へ目付頭を致して居りますが海賊の大親分です。船路の樣子を知つてるのは私許りです。もしも强敵に出會つた時は、何時も此航路をとり逃げます。追駈けて來た船は必ずその邊で難船し、或は沈沒するものです。左樣さして頂いても宜しいか」

玉國「船路の勝手を知つてるお前に何事も一任する。さア早くその用意をして吳れ」

ヤッコス「はい、御恩の報じ時でムいます。然らばこれから私が船を操ります」

と櫓を握り八人の水夫に一生懸命に擢を漕がせ矢を射る如く走り出した。賊船は一生懸命に舳を轉じ初稚丸の後を追ふて追駈け來る。

ヤッコスは一生懸命に水夫を勵まし、櫓を漕ぐ。漸く危險區域に船が差蒐つた時、賊船の二三艘は早くも舷々相摩する處迄、近づいて來た。さうして錨を初稚丸に投げつけた。初稚丸は到頭おつつかれて了つた。グヅ〳〵してゐる間に八艘の船は初稚丸の周圍に船垣を作り、各自に弓を滿月に絞つて威喝を試みて居る。ヤッコスは大聲をあげ、

ヤッコス「オイ、貴樣等は賊船ではないか。俺を誰と心得てる。賊船頭のヤッコスだぞ。俺は今大黑主の命令によつて三五教の宣傳使を捕縛し、キヨの港の關所に送る途中だ邪魔をひろぐと容赦は致さぬぞ」

八艘の船を統率してゐた海賊のデブは舷頭に立ち、

デブ「あ、親方でムいましたか。ねらい失禮を致しました。貴方のお乘込の御用船とは知らず、よい獲物が現はれたと、全隊を引率れて、こゝ迄おつ駈けて來ました。誠に濟まない事を致しました。何卒お許しを願ひます」

ヤッコス　『今後は必ず心得たが宜からう。其方が安閑として此湖上に惡性商賣が出來るのも皆此ヤッコスがバラモン軍の目付頭になつてる餘德ぢやないか。俺が一つ首を振らうものなら、忽ち數千人の軍隊を以て貴樣達を捕縛し、且貴樣等の住宅を皆知つてるから、妻子眷族も召捕つて重い成敗に會はされるのだ。それよりもこれから北へ〳〵と進んで、三五教の宣傳使が七八十人やつて來るから、それを捕縛すべく進んだが宜からう。それを巧くやつたならば、其方に望み次第の褒美を、關所の役人に執持つて貰つてやらう。さア行け。後に居る奴は皆弱虫許りだ。一番強い奴はこゝに五六人ふん縛つて連れて來たのだ。グズ〳〵してゐると影を見失ふかも知れんぞ。早く船を引返し、眞北に向つて進んだが宜からう』

デブ　『はい、承知致しました。何分宜しう願ひます。さア皆の者、舳を北に向け、急速力で漕ぎ出せ』

と命令した。忽ち八艘の船は船首を北に向け一生懸命にグイ〳〵と擢の音賑しく鳥の飛つ如き勢で遠ざかり行く。

ヤッコス　『アハ、、、、、もし、玉國別の宣傳使樣、惡人も斯んな時には間に合ふものでムいませうがな。私も昨日迄のヤッコスであればこゝで怎んな謀反を起すか分らないのですが、貴方等の仁慈無限のお心に感じ、今迄やつて來た事が恐ろしくなりまして、今日は漸く人間らしい氣分になりました。神樣の教を聞いたものが嘘僞りを申すのは誠に濟まん事とは存じ乍ら、此場合臨機應變の所置を採らなくてはならぬと存じ、心にもなき僞りを申しました。何卒神樣にお詫を貴方樣からして下さいます樣お願致します』

と眞心を面に現はして賴み入る。

玉國「ハ、、、、やア感心だ。人喰人種が俄に如來樣になつたのだな。それではダル、メート樣も、もはや喰はれる心配もないから今迄の怨みをスックリ湖に流して同じ船の一蓮托生、和氣靄々と打解けて此湖を渡らうぢやないか」

バラモン組、並にメート、ダルの兩人は「ハイ」と嬉しゆに差俯向き涙さへ滲ませて居る。

ヤッコスは櫓を操り乍ら歌ひ初めた。一同は舷を叩いて賑々しく之に和した。その聲は水面に響き渡り海底の龍神を驚かす許りに思はれた。

ヤッコス「テルモン湖水に昔から　鬼よ惡魔と呼ばれつゝ
往來の船を引捕らへ　寶を奪ひ衣を剝ぎ
尊き人の命まで　とりて其日を送りたる
惡逆無道のヤッコスも　バラモン軍の勢に
辟易してゆ黃白を　數多散じて賄賂とし
キヨの港の關守に　うまく取入りバラモンの
目付頭と選まれて　密かに海賊使役しつ
惡と虛僞とに日を送る　此ヤッコスも天命盡き
勝手覺わし海原も　俄の暴風に進路をば
謬り暗礁に乘り上げて　木葉微塵に船碎き
こゝに五人は眞裸体　波を潛りて漸くに
水泳に長けた三人は　人の恐れて寄りつかぬ

荒浪狂ふツミ島へ
飢に迫りて罪人を
力限りに格闘し
息も絶えんとする時に
教の道の宣傳使
危き命を救ひまし
說き玉ひたる有難さ
神の御聲に目を覺まし
初稚丸に乘せられて
波に漂ふ折もあれ

命から〳〵泳ぎつき
屠り殺して喰はんと
互に體は疲れ果て
仁慈無限の三五の
現れまして吾々が
清き教を諄々と
流石無道の吾々も
有難涙にくれ乍ら
キョの港に歸らんと
前方に浮ぶ八艘の

船は正しく吾部下の
見るより早く進路をば
聞ねし灘に駈け向ふ
矢を射る如くおッついて
四方八方取圍む
命を救ひ高恩に
幸ひ部下のデブ以下に
並べて漸く追ひ散らし
晴れ渡りたる月の空
あゝ惟神々々

デブの率ゆる賊船と
轉じて湖中の危險地と
湖に慣れたる賊船は
思ひも寄らぬ獲物ぞと
海より深き恩人の
報ひまつるは此時と
嚇し文句や僞を
初めて胸もサヤ〳〵と
實にも芽出度き次第なり
御靈幸倍ましまして

千波萬波

暗礁點綴する湖を
吾等一行をやす〳〵と
思へば〳〵昔より
善と眞とに背を向け
心を曇らせ居たるこそ
省みすれば後の世が
此世を造りし神直日
只何事も人の世は
三五教の大御神
赦させ玉へと願ぎ奉る

無事に彼岸に達せしめ
キヨの港へ着かしめよ
神の心は露知らず
惡と虚僞とに一心に
實にも愚の至りぞと
いと恐ろしくなりにけり
心も廣き大直日
直日に見直し聞き直す
今まで犯せし身の罪を
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも
假令命は失するとも
捧げ奉りしヤッコスは
憐れみ玉へ惟神
畏み〳〵願ぎ奉る」

これの湖水は乾くとも
一旦神に眞心を
如何でか曲に溺れんや
皇大神の御前に

斯く歌ひ乍ら漸くに船首を再び西南に轉じ潮流にのつて月の海面を辷り行く。

（大正一二、三、二九、舊二、一三、於皆生温泉濱屋、北村隆光録）

第一一章　欵乃（一四八六）

漸くにして月は西の波間に沈み、星は次第々々に隱れ、東の波間よりはカッと明りがさして來た。雲か波か、天か海か、區別のつかぬ遙かの空は次第々々に茜さし、湖上を渡る百鳥の聲は數千人の樂隊の一時に樂を奏する如く頭上一面に聞ゐて來た。白青、黑、綠、黃色、赤等の色々の羽を飜して前後左右に飛び交ふ水鳥の影は實に壯觀であつた。

玉國別は舷頭に立現はれ、東の空に向つて拍手し天津祝詞を奏上し、航路の無事を祈願した。續いて三千彥其外一同は玉國別に倣つて東方を拜した。輪郭のハッキリした巨大な太陽は湖水の中から覗き初めた。夏の朝の海上は又一入爽快なものである。

玉國別『雲か波か天と地とを結びたる
　帳を分けて浮ぶ日の神。
今日も亦これの海路の幸くあれと
　心も清く祈りけるかな。
百鳥は波の上をば辷りつゝ
　吾乘る船を守るべらなり』

三千彥『テルモンの峰の頂上ほのぼのと
　波に浮びて明くなり行く』

眞純彥『何一つ眼に入らぬ湖原も
　テルモンの山の姿のみ見ゆ。

テルモンの山打仰ぎ思ふかな

ケリナの姫は如何に在すかと」

伊太彦「又しても姫の事のみ氣にかゝる

教司の心怪しき」

眞純彦「いたいけな女を思ふ誠心は

男子の中の男子なるぞや」

伊太彦「何事も女ならでは夜が明けぬ

世の諺を眞に受けし君。

女のみ此世にゴラ〳〵居るならば

如何で榮ゑん天地の間」

三千彦「益良夫が思ひつめたる眞心は

通はざらめや女心に」

伊太彦「よくもまア惚けたものだ三千彦の

目鼻の位置も何時か變りぬ」

デビス姫「益良夫の中に交りて只一人

胸を痛めつ御後に從ふ。

男子のみ如何に力が在すとても

女の目には敵し難けん。

只一目瞳を清く射照らせば

春の氷の一たまりなし」

眞純彦『猛烈な二人の戀にせめられて
　吾は言葉もつまりけるかな。
呆れ果て物さへ云へぬ船の上
　潮三千彦の思ひやらるゝ』

ヤッコス『皆樣は暢氣な事を云ひ交はし
　笑はせ玉ふ身こそ羨めし。
朝夕に心の鬼に怖ぢ乍ら
　惡を行ふ身こそ悲しき。
一日も心安けく送りたる
　時ぞ無かりし賊の身の上。

さり乍ら神の敎を聞きしより
　心安けくなりにけるかな』

ハール『吾も亦心の鬼は何處へやら
　逃げ失せたりし心地こそすれ。
惡き事なす程馬鹿が世にあろか
　寢ても覺めても心おぢ〳〵。
今となり誠の道の味はひを
　覺りけるかな神の惠に』

サボール『世の人に懶怠漢よサボールと
　譏られ月日を送りたる曲。

曲神も心の空に月照りて
　吾身も廣く安くなりける」

メート『恐ろしきメートの旅をなすのかと
　思ふ間もなく救はれにける。
冥土行き神に救はれ之からは
　誠の道にメートル上げん」

ダル『手も足も痩衰へてダルの吾
　蟹や貝にて露命つなぎつ。
久振りうましきパンを與へられ
　蘇生りけり餓鬼の吾々」

玉國別『天地の神の惠みは海の原
　廣けき波の底ひ知られず。
いざゝらば心の駒を立直し
　進みて行かん神の御國へ」

デビス姫は舷頭に立ち湖面の風景を眺め小聲になつて歌ひ初めた。

デビス姫『久方の天津御空を
　打仰ぎ大海原を
打眺めよく〳〵見れば
天地の神の功業は
目のあたり現はれましぬ

千波萬波

あな尊あな畏しや
あなさやけ天津日影は
海原を照らして昇り
御光を天地四方に
配らせつ百の人草
草や木の片葉の露に
至る迄宿らせ玉ふ
大梭威四海の波は
穏かに治まりまして
常磐木の松の緑は

すく〳〵と生立ち茂り
春來れば白花千花
咲き匂ひ神の御國は
眼のあたり開け進みて
勇ましや波漕ぐ船の
すく〳〵と彼方の岸に
渡らひの神の使の
宣傳使真辛くあれと
宣り奉る朝日は照るとも
曇るとも月は盈つとも

千波萬波

虧くるとも星は空より
落つるとも誠一つの
三五の教の道は
世を救ふテルモン山の
神舘鬼國別の
父の前母の御側を
相離れ千里の海を
乘り越えて萬里の旅に
出でゝ行く吾は女の
身なれども男子の中の

男子なる玉國別の
神司心の空も
眞純彦喜び胸に
三千彦の吾脊の君に
從ひて曲の征途に
上り行く吾身の上ぞ
樂しけれ此世を造り
玉ひたる國治立の
大御神豐國主の
神柱神素盞嗚の

歌乃

瑞御靈齋苑の館や
コーカスの珍の聖地に
現れまして天ケ下なる
諸々を救ひ助けて
神の世の無限の歡喜を
與へんと聖き心を
配りまし百の司を
任け玉ひ魔神の猛ぶ
葦原の島の八十島
八十の國彌永久に

治めんと仁慈の心を
現はして勵み玉ふぞ
畏けれ勵み給ふぞ
畏けれ
あゝ惟神々々
御靈幸はひましませよ
あゝ惟神々々
御靈の恩賴を願ぎまつる」

船頭のイールは櫓を操り乍ら聲も涼しく歌ひ初めた。

イール「北見の濱を立出でゝ　南をさして進み行く

吹き來る風はそよ〳〵と　汗ににじんだ顏洗ふ
極樂淨土か天國か　波は平に安らかに
船底靜に鼓拍つ　波から出で、波に入る
月日の影も清らかに　夜と晝との隔てなく
光りを投げる湖の面　雲の空行く此船は
天の川原を打渡る　目無堅間の神の船
鳥は中空に嬉しげに　チン〳〵チュン〳〵啼き亘る
波はドン〳〵鼓拍つ　天の川原に船泛べ
棚織姫が漕ぎ渡る　こゝは龍宮の波の上
乙姫さんも嘸や嘸　空を仰いで行く船を
笑を湛へて見てムらう　千尋の海を渡り行く
天津御空か中空か　月日も星も下に照る
月は波間に輝き玉ひ　海の底には星の影
天の川原が横はる　空漕ぎ渡る玉の船
如何に荒波猛るとも　神の守りの此船は
嚴の御靈の救ひ舟　瑞の御靈の守り舟
千里の波を打渡り　心やす〳〵キヨ港
水は紫野は青く　花咲き匂ふ國へ行く」
聲もなだらかに海に慣れたる調子で歌ひ乍ら櫓を操り進み行く。

（大正一二、三、二九、舊二、一三、於皆生温泉濱屋、北村隆光錄）